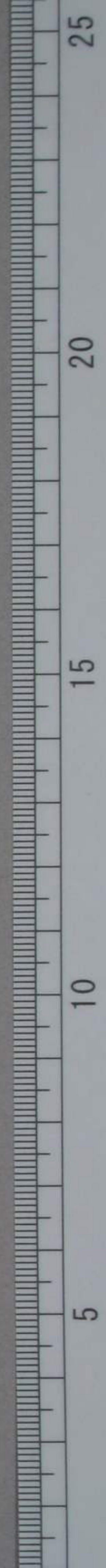
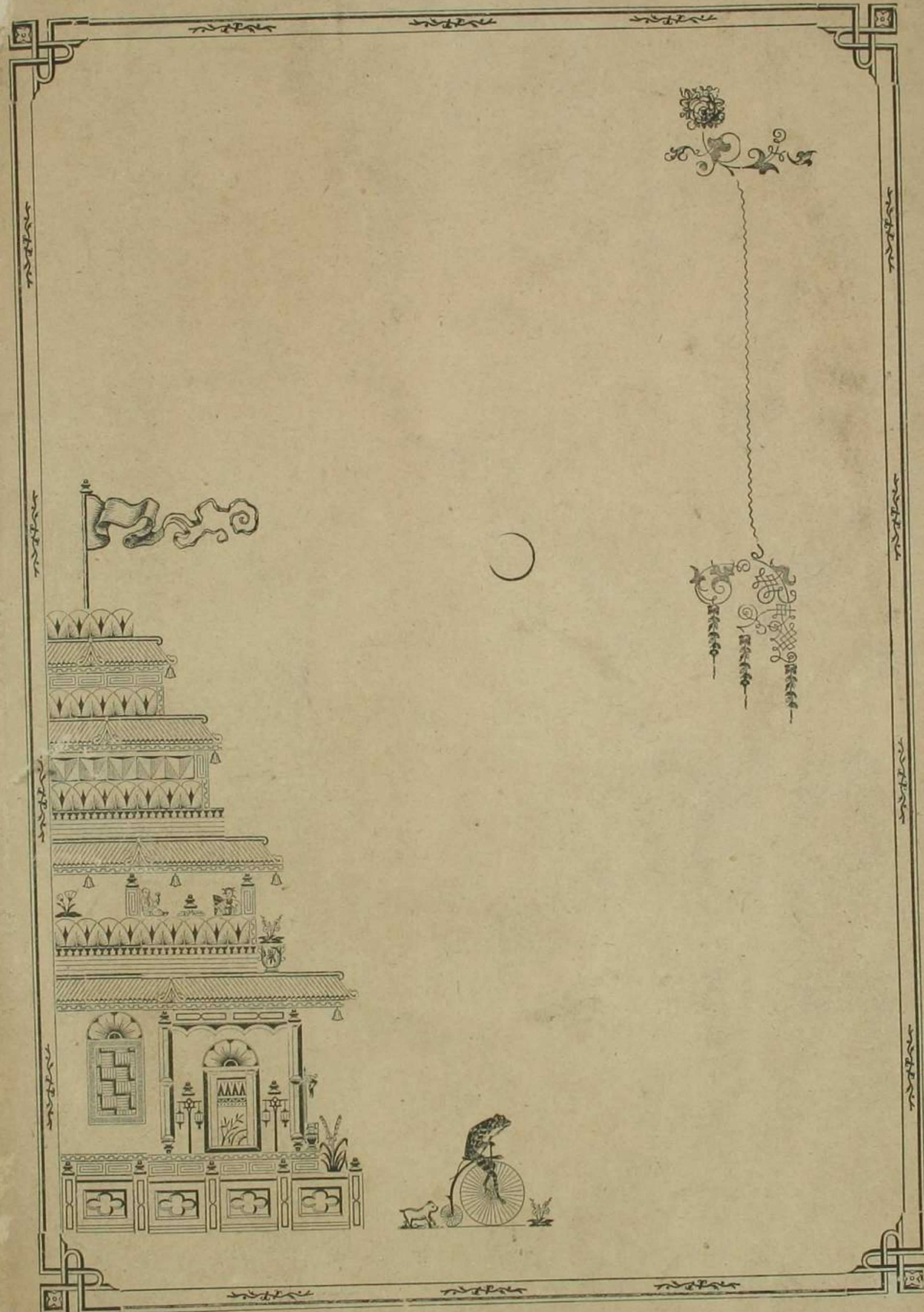
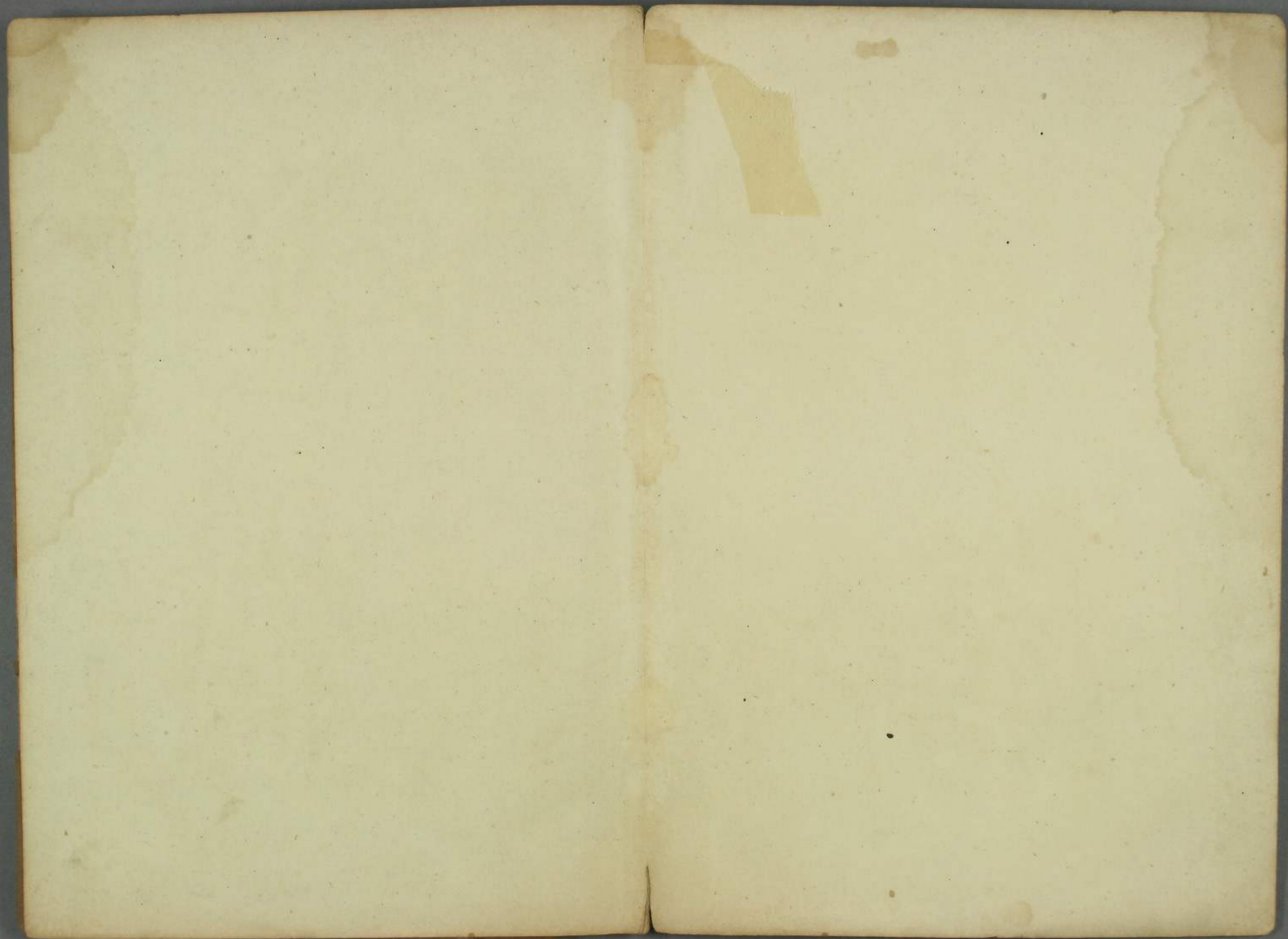


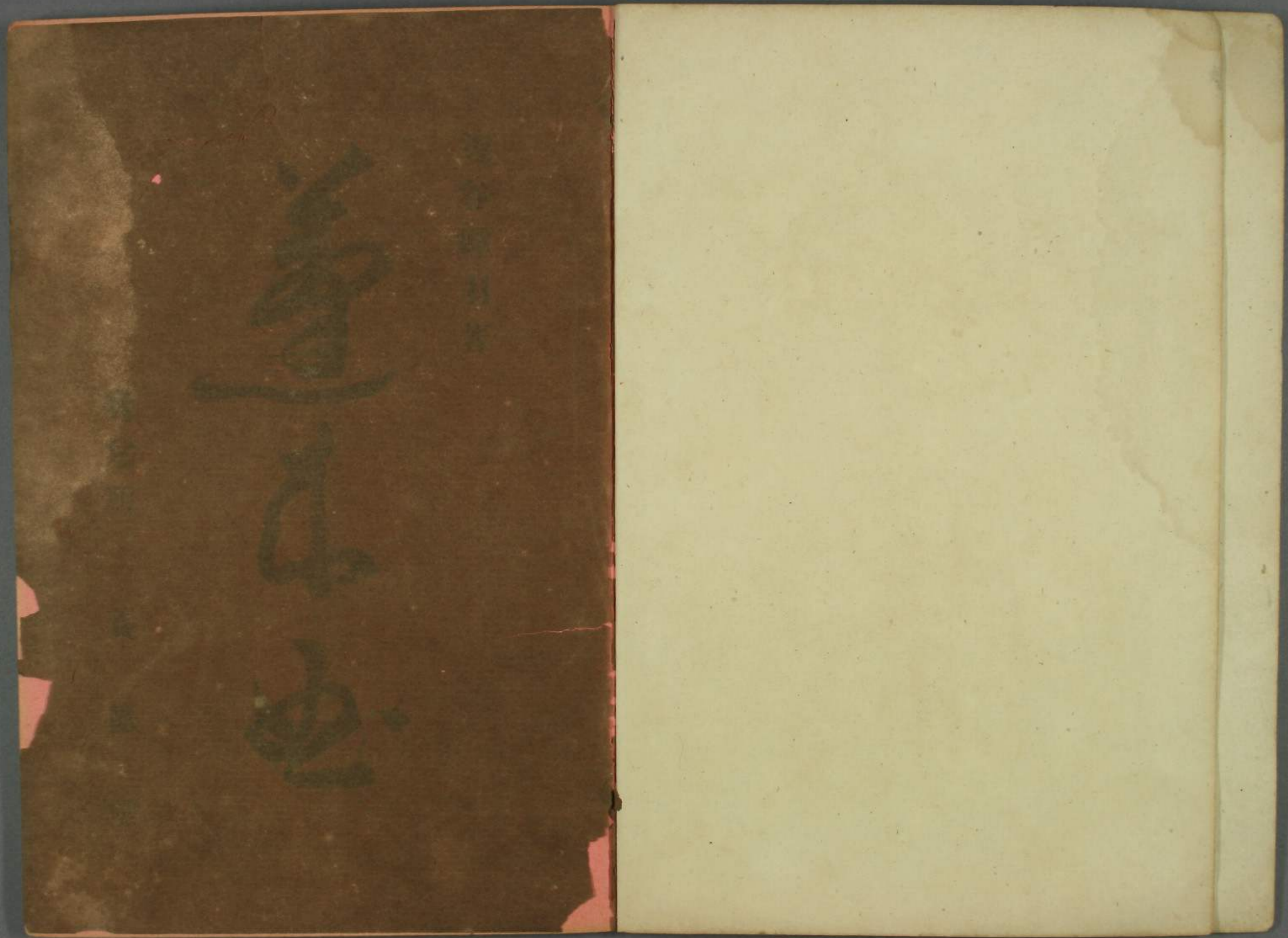
蓬萊曲











透谷蟬羽著

道本心

發兌所

養

眞

堂

序

蓬萊曲將に稿を脱せんとす、友人某來りて之を一讀し詰て曰く、蓬萊山は古來瑞雲の變態くところ、樂仙の盤桓するところ、汝何すれぞ濫に靈山を不祥なる舞臺に假り來つて狂想者を悲死せしむる。又た何すれぞわが邦固有の戲曲の躰を破つて擅に新奇を衒はんとはする。

蓬 余は直に之を遮つて曰く、わが蓬萊曲は戲曲の躰を爲すと雖も敢て舞臺に曲けられんとの野思あるにわらず、余が亂雜なる詩躰は詩と謂へ詩と謂はざれ余が深く關する所にわらず、韻文の戰爭は江湖に文壇の良將あり、唯た余が此篇を作す所以の者は、余が胸中に踳據せる感慨の幾分を寒燈の下に、彼の蠶娘の營々として織絲を其口より延べ出る如く余が筆端に露洩せしむるに過ぎざるのみ、然も彼れが勞むるは家を造りて之に入らんとするかれども余が晝間劇務の後に滴々半烹の句を成すところの者は徒に余をして債を起して債ある白紙を反古と化せしむるに止まらんを知る。

(1) 蓬萊山は大東に詩の精を迸發する、千古不變の泉源を置けり、田夫も

之に對してはインスピレイションを感じ、學童も之に對して詩人とある、余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に對する詩人とされること久し、回顧すれば十有六歳の夏ありし孤筇其絶巔に登りたりし時に余は始めて世に鬼神ある者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路遂に余をして彼の瑞雲横ばり仙翁樂しく棲めると言ふ靈嶽を假り來つて幽冥界に擬し半狂半眞ある柳田素雄を悲死せしむるに至れるなり。友人再び曰く、然らば汝は魔鬼魅魘の類を信ずるや。余答へて曰く、信ずるにもわらず、信ぜざるにもわらず悲哀極つて頓眠する時に神女を夢み、劇熱を病んで壁上に怪物の横行するを見るが如きのみ。友人乃ち放笑して去る。此に於て童子をして燈に油を加へしめ筆を走らせて談話の概畧を記し以て序に代ふ。

明治二十四晚春

透谷橋外の小樓に於て

蟬 羽 子 識

蓬 萊 曲

蟬 羽 子 著

曲中の人物

- 鶴翁 (蓬萊山の道士)
- 源六 (樵夫)
- 雪丸 (仙童)
- 柳田素雄 (子爵、修行者)
- 勝山清兵衛(柳田の従者)
- 露姫 (仙姫)
- 大魔王、鬼王若干、小鬼若干、
- 戀の魅、青鬼、等。

第一齣 (一場)

蓬萊山麓の森の中

日没後

(柳田素雄琵琶を抱きて森中に徘徊し)
 (従者勝山清兵衛少し晩れて來る。素)
 (雄琵琶を取出て一彈調を成さず仰で蓬萊嶽の方を眺盼する所)
 素、
 雲の絶間もあれよかし、
 わが燈火なる可き星も現はれよ、
 この身さながら浮萍の
 西に東に漂ふひまのわけくれに
 なぐさめなりし斯の靈山、
 いかなれば今宵しも、麓に着きて
 見えぬ、悲しきかな〜。
 戀しき御姿の見えぬはいかに、

わが心、千々に碎くるこの夕暮
都を出で、

わがさすらへは春いくつ秋いくつ、
守る關なき歳月を、輕しどて仇し
草わらんじ、會釋なく履きては
捨て、履きては捨て、踏みてはのこし
踏みてはのこす其迹は

白浪立ち消ゆ大海原

越え來し方を眺むれば

泡沫の如くに失行く浮世。」

牢獄ながらの世は逃げ延びて

幾夜旅寢の草枕、

夢路はるくたどりたどれど

頼まれぬものは行末なり。

折々に音づるゝと覺しきは

彼の岸に咲けるめでたき法の華、

からくも悶え手探れば、こはいかに、

まこと、見しもの、これも夢の中なる。」

浮世の水は何所とも知ず流れ行く、

われも亦た流るゝ儘の旅の身を、

寄せて息めんたのめもなし。

早瀬緩瀬と變るは水のならひなる、

變れを止まることはなし、

わが旅もまた急ぐ急がぬ折こそあれ

いつかはまことに静まらん、

その稍しづまる渚には、

蛋の刈藻の根を絶たで、

うたてや意をしがらむなる。」

あちこちのめづらしき山、めづらしき水、
愛づるが中こそ稍安く、

蟬の羽のひえわたる寢床にも眠りけれ、

眠るといふも眼のみ、

心は常に明らけく、世の無情をば

睨みつ慨きつ啣ちけれ。

左程にきらはるゝわれなれば、

逃げ出んこそ易けれど

わが出る路にはくろがねの

連鎖は誰がいかなる心ぞ、

去らばとて留まらんとすれば

筈を擧げて退ふものぞある。」

家出せま時

つらく別れし戀人は、はかなくも、

無常の風の誘ひ來て

無き人の數に入れりと聞きしより

花のみやこも故郷も

空しくなりて、われをのまむとする

菩提所のみぞ待つなる可し。」

去ねよ、去ねよ、彼世には汝が友の

待ちあくがれて招くものを

と罵る聲は「死」のつかひよりや出らん、

われも世を去らまくほしき

思ひ出の昨日今日にはあらなくに如何せん

招けば「死」もわが友ならず。」

いづこを見ても鞭持つ鬼、

わが脊、わが面を圍むなり、

往け往けと追はるゝ儘に

行衛定めぬ旅衣、

汚れやつれて見る影もなき態

鬼の姿にもまがらべし。

左ればとて世を避る身は

何ぞか新衣のひまあらん。

世の鞭笞稍や遠ければ

深山霞立籠めて空しく迷す夕もあり、

浮世の風こやみするところには

朝霧渡れる水の音に驚き覺る折もあり、

いづこを宿と定めねば

追はれぬ時は心も急かず夢は現と

かはりつゝ、

書取上げて眼を驅りつ

燈火の疲れはて、自らに消ゆるまで、

書の無き折はまた

狂ふまで讀む自然の書、世のあやしき與、

物の理、世の態も

早や荒方は窮め學びつ、生命の終り、

未來の世の事まで

自づから神に入りてぞ悟りにき。

指屈むれば盡き難き

名所の數々に、昔と今を訪ひはたし

月をも花をも厭ぬる程に眺めにき、

さても西の都の麗はしきも、

また東方の花の堤の

屋形の船の酔心地、おもひかへせば

仇なりし夢なりし、幻なりし。

南の末にたゞよひし時には烟燻く山

北の極をあさりし時には凍氷の丘、

めづらし、めづらしと

た、へ喜びしが、これも亦た瞬刻

の慰快なりし、今は早や、夢にも

上らず、回想も動かず。

われには早や珍らしき、

者あらず、樂しき者あらず、

この世、この世、美しくしき

この世の悲しきかな、抑今は何者ぞ、

山を河を、野を里を、殿を城を、

載せ餘し置飾りても、わが眼には

空虚どのみぞ見ゆるなる。

空しくも見ゆるかな山と積む書の中、

われに來よとや、招かずもがな、

何に樂しからん、其が中に、盡ならぬわれ。

空しくも見ゆるかな、美しくしき戀心、

われに來よとや、招かずもがな、

何に嬉しからん、狂ふばかり欺かるゝを。

空しくも見ゆるかな、いかめしき家づくり、

われに來よとや、招かずもがな、

何に喜ばん、人をひれ伏せて、鬼ならぬわれ。

位も爵もあらずもがな、わが爲には。

去は去ながら捨てし世の

いまはしき繩は我を、なほ幾重

巻きつ繋ぎつ、

逃しはやらじこの漢、と罵る聲の

いづれよりもなくきこゆるなり。

ぬぐへども、ぬぐへども、わが精神の鏡の

くもりを如何せん、

其の鏡にはつれなくも、

過ぎこし方のみ明らかかに、

行手は悲し暗の暗。

その常暗の中を尋ねめぐり、あさりまはりて

いまだ真理の光見ず、

見るは唯いつはりの、立消ゆる漁火のみ。

悲しきはこの身なり、世に従ひ難くて、

世に充つる魔靈の軍兵になり終らで、

在家も出家もおしなべて

うち靡かせて、世を、我物顔なる怪しの

鬼の、圍みの中にあればぞよ、

四邊は暗く人は眠るに、

われひとりねの床に涙の露車。」

(清兵衛素雄が袖をひきて)

蓬

清、

心を注め玉へや怪しき聲のするに。

素、

何に、怪しき聲とや、

われは聞かず、其は何の聲ぞや。

近き彼方の森を襲ふ風の鳴るにもや。

清、

否左ならず……あら復た聞こゆ
今聞ゆるに、はて何所なる、怪しきかな。
我はえきかず、そはいづこに？

曲

素、

壯者、塵をまつめて造られながら！

世の鬼に惱められて、世を逃れんどもかくとや、

あら笑止！ いつまでの旅路に思ひを遂げん、

五十の年月長し短かし問ふひまも

暴風雨吹き起り、秋の氣躍り、

波に呑まる、捨小舟、散り落つる樹の葉。

死の波寄する時いかん、身の秋來る折いかん、

あはれ、あはれ塵を蒐めし空蟬の五尺、

なほ傲り顔に、狭き世を旅び渡り、

暫時留まる春の駒に、

むちあげて、あのれの終りを急がする。

あかしくも嘲るかな、

抑も何物にてか、定まれる人の運命を

あのれを外に譏るらん。

あろかなるかな、われを知らずや、

空中の聲、

何所とも知らず……彼方此方につぶやく聲。

彼方此方に？ つぶやくこゑ？ あやし！
然なり然なり、聲すなり、われも今聞きぬ。

いかに、いかに、如何なる者の聲ならん、
鬼神の類や近づける。さもあらずば、
御山の靈や迎へ出でぬるか。

走りても兎てもいまは詮なし、
怖ろしき目に會ひなんも計られず。

何にを清兵衛は恐るゝぞ、おに神は
爰のみならず、何所にも住むなるを。
静まれよ、われは今、
彼を呼び出でん、いかなる様の者なりや。

あら聲すなり、聲すなり、
われに語ると覺ゆるぞ、おもしろし。

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

この靈山に棲み馴れて、世の神々を
下女下男と召使ひ、ひれふさするもの
われなるを知らずや。

怪しきことを言ふものかな。

さては神々の上の神なるは汝か、
まことや、痴愚なるは神と呼べるもの、
世に禍危の業をのみなし、正しき者を
滅びさせ、偽はれるものを昌させ、
なほ神とは自から名告るなり！

まだ罵るや塵の生物！

狭き世の旅は早や爲さずとも、
わが住む山に登れかし、高き神氣を
受けなば誤まれる理の夢の覺めもやせん。

雪を踏みて登らずや神の力もて。

語らんことは彼方にて。

空中の聲、

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

素、

彼を呼び出でん、いかなる様の者なりや。

あら聲すなり、聲すなり、
われに語ると覺ゆるぞ、おもしろし。

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

清、

この靈山に棲み馴れて、世の神々を
下女下男と召使ひ、ひれふさするもの
われなるを知らずや。

怪しきことを言ふものかな。

さては神々の上の神なるは汝か、
まことや、痴愚なるは神と呼べるもの、
世に禍危の業をのみなし、正しき者を
滅びさせ、偽はれるものを昌させ、
なほ神とは自から名告るなり！

まだ罵るや塵の生物！

狭き世の旅は早や爲さずとも、
わが住む山に登れかし、高き神氣を
受けなば誤まれる理の夢の覺めもやせん。

雪を踏みて登らずや神の力もて。

語らんことは彼方にて。

空中の聲、

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

素、

彼を呼び出でん、いかなる様の者なりや。

あら聲すなり、聲すなり、
われに語ると覺ゆるぞ、おもしろし。

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

清、

この靈山に棲み馴れて、世の神々を
下女下男と召使ひ、ひれふさするもの
われなるを知らずや。

怪しきことを言ふものかな。

さては神々の上の神なるは汝か、
まことや、痴愚なるは神と呼べるもの、
世に禍危の業をのみなし、正しき者を
滅びさせ、偽はれるものを昌させ、
なほ神とは自から名告るなり！

まだ罵るや塵の生物！

狭き世の旅は早や爲さずとも、
わが住む山に登れかし、高き神氣を
受けなば誤まれる理の夢の覺めもやせん。

雪を踏みて登らずや神の力もて。

語らんことは彼方にて。

蓬

素、

何所とも知らず……彼方此方につぶやく聲。

彼方此方に？ つぶやくこゑ？ あやし！
然なり然なり、聲すなり、われも今聞きぬ。

いかに、いかに、如何なる者の聲ならん、
鬼神の類や近づける。さもあらずば、
御山の靈や迎へ出でぬるか。

走りても兎てもいまは詮なし、
怖ろしき目に會ひなんも計られず。

何にを清兵衛は恐るゝぞ、おに神は
爰のみならず、何所にも住むなるを。
静まれよ、われは今、
彼を呼び出でん、いかなる様の者なりや。

あら聲すなり、聲すなり、
われに語ると覺ゆるぞ、おもしろし。

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

この靈山に棲み馴れて、世の神々を
下女下男と召使ひ、ひれふさするもの
われなるを知らずや。

怪しきことを言ふものかな。

さては神々の上の神なるは汝か、
まことや、痴愚なるは神と呼べるもの、
世に禍危の業をのみなし、正しき者を
滅びさせ、偽はれるものを昌させ、
なほ神とは自から名告るなり！

世に充つる魔靈の軍兵になり終らで、

在家も出家もおしなべて

うち靡かせて、世を、我物顔なる怪しの

鬼の、圍みの中にあればぞよ、

四邊は暗く人は眠るに、

われひとりねの床に涙の露車。」

(清兵衛素雄が袖をひきて)

蓬

清、

心を注め玉へや怪しき聲のするに。

素、

何に、怪しき聲とや、

われは聞かず、其は何の聲ぞや。

近き彼方の森を襲ふ風の鳴るにもや。

清、

否左ならず……あら復た聞こゆ
今聞ゆるに、はて何所なる、怪しきかな。
我はえきかず、そはいづこに？

曲

素、

壯者、塵をまつめて造られながら！

世の鬼に惱められて、世を逃れんどもかくとや、

あら笑止！ いつまでの旅路に思ひを遂げん、

五十の年月長し短かし問ふひまも

暴風雨吹き起り、秋の氣躍り、
波に呑まる、捨小舟、散り落つる樹の葉。
死の波寄する時いかん、身の秋來る折いかん、
あはれ、あはれ塵を蒐めし空蟬の五尺、
なほ傲り顔に、狭き世を旅び渡り、
暫時留まる春の駒に、
むちあげて、あのれの終りを急がする。
あかしくも嘲るかな、
抑も何物にてか、定まれる人の運命を
あのれを外に譏るらん。
あろかなるかな、われを知らずや、
空中の聲、

素。

おさらばよ、爰は浮世、長くは談らじ。

あな怪しの神よ、はや去ぬるか、

まだくひまに顯はれて早や消ぬるか、

めづらしき聲、めづらしき罵言、

いづれに失せて行きぬるや。

濃き雲を離れて現はる、星ひとつ、

それか？ それならじ、それも早や隠れぬ、

何所にや去りけん、も一度顯はれずや、

いなよ、早や呼ひ返へすべき術はあらじ。」

御雪を踏み登れと言へり。

神の力もて登れと言へり。

かねての望みはありながら、

いかでわれ、このわれが、

神の力なくて登るべきや雪の御山に。」

清兵衛、これをいかにす可き？

清。

父君に托ねられて都を跡に旅鳥の、

ねぐらをどこぞ白波の

打ちかへし打ちかへす君が心の荒磯を、

主なればこそ、頼なればこそ、

わが身は良しや深山路の

苔の袂に老ひ朽ちぬとも、

君が身に恙あらせじと祈りつ

願ぎつ歳月空しく過にけり。」

君のありこし不満、不平、不和の

はじめ、をばり知れるこの身、

兎ても世には歸へり玉はじと、

涙ながらに思ひあきらめても

さて悲しきかな、君が心の荒らくして

悪魔を呼びて朋友となすとは！

今宵いかなる故やらん

蓬 菜 曲

素。

檜の根を枕の昨夜の夢裡も、

こころにかゝる折しもや、今の悪鬼の

罵り嘲する聲音、わが健き足の、

歩めぬほどに怖ろしや、怖ろしや。」

昨夜の夢と？ あかしきこともあらば

何どか今まで隠しつる。」

否、あかしきことならず、おそろしき

目に會ひぬ。

其の恐ろしきことこそあかしきなれ

いざ語れ、語らざや。

きみは彼方の檜の根を、

われはこなたの檜の根を、枕となして、

狼の遠吠絶て、息めば心は早や眠り、

眠ると思へばまた覺めて、

眠る覺むるの境もわかずなりしころ、

素。

世を去り玉ひしと聞きつる

露姫……の、端なくも、わが枕邊に

佇まれける。」

何に、露！ 露姫とや！

露がいかに……姫がいかにせし。」

姫はやつれ衰ろへし姿して、

「素雄、どのを何とよこせぬ」

と、ひと言は聞しも、あどほ野風

のそよ吹くのみ。」

笑しや、夢はいつはり多し。

其を心にかげなば、世には、

まことばなかりなん。

姫がこど、われも思はぬにはあらねども

空蟬のからは此世に止まれど、魂魄は

飛んで億萬里外にあるものを。

清。

つらく思へば、このわれも、

世の形骸だに脱ぎ得たらんには、

姫が清よき魂の翫々たる蝴蝶をば、

追ふて舞ふ可し空高く。

人の世の塵の境を離れ得で

今日までも、愚や墟坑に呻吟けり。

とても限りなき苦悶をば

こよひ解き去り、形骸をば

世に捨て、行かんや、「死」ども「滅」ども

世の名を付けて、われを忘れさせ、

彼方の御山の底の無き

生命の谷に魂を投げいれん。」

「死」ども、「滅」どもや？ 其は恐ろしき

者なりかし。わが君これを願玉ふ

あな悲し護り玉へや神よ佛よ

素。

徒らに神の名を呼びそ。

死は恐るべき者ならず、

暫しが程の別れの悲しみのみ。

わか如く世に縁なきものは、

死こそ歸ると同じ喜びなれ。去るならず

別るゝならず。めぐり會ふ人もあるべし

うれしこそは思ふ可けれ。

世にありて、

梁を走せ、佛壇に潜み、

柵を掠め、銅を覗ふ業、

鼠はなせど、人の事ならじ。

鐵の鎖につながれて、窓には風も通はさぬ

囚牢の中に、世の人安々眠れども、

悲しみ覺えし身にはまどろまされず、

したしむものは寂しく懸る軒の月。

清。

軒下に狭まく穢さき籠の中、

擦餌に育てあげられし鶯の、

春になれば鳴かぬや何せ鳴かぬと責られて、

聲は折々揚げしかど

庭面の梅が香欲くて鳴しのみ。」

この囚牢、この籠を、

こよひならねば何時破るべき！

あさらばよ清兵衛！

この囚牢、この籠にもあさらばよ！

これよりはわれわが君ぞ！

魔にもあれ鬼にもあれ、來れかし來れかし

わが道案内させてん、

早や行かん、あさらばよ！

待ちたまへ、わが君よ、

悲しき思出をせらるゝかな、

素。

みやこには戀し戀しと父母の

老ひたる君や待ち詫び玉ふなるに。

そを捨て、何地へ渡り玉ふぞや。

要なきことは言はずもあれ、この世

わが物ならず。わが物ならずかぞいろも。

戀ひし親しの睦みとて

母が落せしひとしづくとも

思へば長からぬ世の寶ぞ。」

誰が抑も何心にてや造りたりけん、

このわれ、塵のわれ、ひとやの中のわれ、

くらさ、さびしさ、やましさ、かなしさ

知らず顔なる造りぬしや誰れ？

(素雄行んとす)

こはいかに、わが君狂ひたまふか？

いづこへや行き玉ふなる。

素。

狂ひはせず、静かに家に歸るなれ、

われを捨ておけ。汝は行きて、

ひとやのうちの家を守れかし。

あさらばよ、かねて背きしたらちねにも！

清。

否、いづこへなりと従はしてよ、

君が爲には何にか惜まん。

素。

否よ、否よ、われひとりならでは……

雲の中には伴は要なし。

いざや、いざや、別れぞ、別れぞ、

生別れども、死別れども

ならばなれ！



第二齣

第一場 蓬菜原之一

(柳田素雄琵琶を抱きてたゞひとり)

(この原を過るところ。)

素。

あさらばよ！ 烟の中に消えよ浮世、

あさらばよ！ 住み古りし旅馴れし

塵の世。

これよりは馬らし、われにも物と思はせそ、

かたみに忘れん、敵意も恨ごゝろも、

わが在りし跡も無からせよ。」

思ひぞ出づる、

終日歩みの疲れに、假の宿なる

草叢に、しばしまどろめば、

齒を切ませ、眼をひらかせし野ばら！

その花のゆかりに、あやしくも

ひと夜を眠りもやらす過ごせしを、

明くる朝は無残刺ゆるに、

わが掌に紅の斑見し。」

木の枝を、

其が儘なる旅の杖、投げ置きて

ひとむら繁き花の野に、

横雲眺めて熟ねむり。

日紅々と登れるところに起出でて、

見ればわが杖花の蔓にまどはれて、

われと共に起たざりけり。

うち捨てたるは人なき山路、

今はいかに、あどろがもどに

朽ちはてゝあらんそも。」

われのみと思ひは差ひて。

情なき人に飼はれてや、

あはれ小^こ狗^{いぬ}の瘦^やせさらばへたるが、

わが前に悲^{かな}しく尾^おを垂^たれて

物^{もの}欲^ほし氣^けに鳴^なきしにわれも

物^{もの}言^いはぬ涙^{なみだ}を催^{もよほ}して

糧^{かて}を分^わちて取^とらしつゝ、

旅^{たび}路^ぢの伴^{とも}とせし事^{こと}もありき、

彼^{かの}狗^{いぬ}今^{いま}はいかになりし、

架^けにや飼^かはれて堯^{ぎやう}に吠^ほゆる

たぐひとなりもやしてん。」

實^けに思^{おも}ひ出^いれば限^{かぎ}無^{なし}し、

みな共に彼^{かの}方^{かた}の烟^けに埋^もれよ。」

こゝ新^{あらた}らしき世^よなる可^べし

夜^や陰^{いん}の中^{なか}にも物^{もの}の景^け色^{しき}變^{かは}りて見^みゆ、

雪^{ゆき}の御^み山^{やま}よりあくる山^{やま}あろし

高^{たか}き所^{ところ}に雲^{くも}の宿^{やど}をあらすらん、

見^みるが内^{うち}に濃^{こくもろ}雲^{うみ}淡^{あは}くなりもてゆきつ

おもしろやたちまちに星^{ほし}の天^{そら}」

御^み山^{やま}を透^とりてひろがれる

裾^{すそ}野^の原^{はら}、見^み渡^{わた}す限^{かぎ}り草^{くさ}ばかり、

さてかすかに見^みゆる遠^{とほ}山^{やま}々々、

それ^{それ}に交^{まじ}はる糺^{ちとせ}糊^したるけふりは

上^{じやう}界^{かい}、下^げ界^{かい}の牆^{かき}にやあらん、

その牆^{かき}を踰^こえ來^きしわが身^みの

今^{いま}立^たつどころは神^{かみ}が原^{はら}、

拂^{はら}ひ盡^{つく}せる浮^{うき}世^よの塵^{ちり}。」

いまは神^{かみ}の時^{とき}にもあらん、

外^{とほ}方^{かた}にては怖^{おそ}ろしとまでに聞^ききし

雪^{ゆき}崩^{なだ}の音^ねも全^{ぜん}たく止^とみ、

世^よにありし頃^{ころ}には胸^{むね}どいろきし流^{りゅう}星^{せい}も

今^{いま}眺^{なが}る天^{そら}には絶^たえて落^おちず。

美^{うつく}しきかないはほの白^{しろ}妙^{たへ}、

わが蹈^ふ行^ゆくは彼^{かの}方^{かた}ぞや〜。」

いぬるかし、いぬるかし浮^{うき}世^よの響^{ひび}、

立^た消^きゆる下^{した}雲^{うみ}の彼^{かの}方^{かた}に静^{しず}まりぬ。

聞^き慣^なれし詛^{のろ}の車^{くるま}輾^まるおと、

憂^{うれ}目^め見^みし罪^{つみ}の火^ひ燃^もゆるさま、

早^{はや}やわが傍^{かたはら}にあらずなりぬ。

吹^ふく春^{はる}風^{かぜ}に送^{おく}られて

何^{なに}に白^{しろ}雲^{うみ}の彼^{かの}方^{かた}を的^{あて}に、

心^{こころ}の駒^{こま}の手^て綱^{づな}弛^{ゆる}めていざ歩^あむ。」

(再び立^た止^とまよりて)

わが琵琶^{びわ}の音^ねしばらくきかず

戀^{こひ}しきものは汝^{なれ}なるを。

この寂^{さび}しき、このをもしろさに、

好^よしや昔^{むかし}の戀^{こひ}妻^{つま}ど、

誰^たが連^つねけん、限^{かぎ}なき虚^こ空^{うら}を際^はもなく

美^{うつく}しき星^{ほし}の華^{はな}を咲^さかせて、歌^{うた}人^{びと}に、

おもしろき曲^{うた}うたへよど促^{うなが}すなる、

こゝに來^きりてわが胸^{むね}は、

燃^もゆる火^ひ焰^はの消^きえかゝり、世^よならぬ春^{はる}風^{かぜ}

そよ〜吹^ふくに、流^{なが}石^{いしが}にわれも爛^た々^たにて、

かつて笑^{わら}ひし岸^{きし}の柳^{やなぎ}の今^{いま}はわが身^みなる

吹^ふけよ神^{かみ}風^{かぜ}、ひるがへし

ひるがへし連^つれ行^ゆけよ。」

見^み上^あれば雲^{うみ}の外^{そと}なる蓬^{ほう}菜^{さい}の山^{やま}、

雲^{うみ}の上^{うへ}は白^{しろ}雪^{ゆき}、雲^{うみ}の下^{した}は春^{はる}の緑^{みどり}、

下^{した}には卑^{いや}しき神^{かみ}の住^すみて

上^{うへ}には尊^{とほ}ときものや住^すむらん。

まぼろしの眼^{まなこ}に入るや聖^{みよ}き靈^{たま}軀^{がた}、

星^{ほし}を隣^{となり}にほゝえむらし。

野の月を窓の内までのぞかせて

歌ひつ弾きつむつれしころの

たのしさはなしども、

心地さはく物に思ひの繋らぬ今宵、

あたりの草花に耳かしがせ、

空を歩く鬼神の靈精をも

驚ろかしてんく。

(背より琵琶を取下ろし熟視)

これなるかな、これなるかな、この琵琶よ

いつしも變らぬわが友は、

朽ち行き、廢れはつる味氣無き世に

ほろびの身、塵の身を、あはれと

音に慰むるもの、

弱きわが心、狭きわが胸の、たのみなき

未來をはかなみて消えまほしと

祈り願しときよ、この琵琶が、

わがむねの門叩きそめけり。

これよりは朝暮の世浪寄する憂時も、

月に浮る、小夜中も、花の霞の其中も

ひと時離れぬ連となりけり。

ひとり寐の、眠りの成らぬ

暗の夜に、覺めながら切齒る苦惱も

起き出で、この琵琶を取上げ、

切々と揚げて弾けば、陰る、悲湧上り

嚙々と抑へてひけば重ね積る憂は消ゆ。

毒を吐く大蛇の蟠渦に途塞れ

こわさ、かなしさ、なさけなさを

この琵琶よ！ 一調高く、毒氣散らせ、

大蛇の形見えずならせぬ。

この琵琶よ！ この琵琶よ！

夜鴉苦しく枯梢に叫ぶ夜半も、

鳴血鳥窓を掠めて飛行く時も、

汝をたのみて、調亂れながら、

わが魂の手を盡して奉でぬれば

忽如現世も真如のひかり！

まばゆきばかりの其光に、

かき眩まされていつしか再た曇る、わが

魂鏡、これをしもまた琵琶の音に、

再び回へすほどけの面！

世の人のいたづらなる戀の闇路も、

この琵琶やわが燈火なりし、

世の人の空しき慾の争ひにも

この琵琶やわれを静めにき、

世の人の様々の狂ひの業にも

この琵琶やわれを定めにき、

さても險しき世に、いかでわが琵琶の如

わが悲哀にもわが歡喜にも

朋友となり分半者となる者や無ん。

(調を整ふ)

みやまの裾には鬼神棲むと聞けり、

鳴れよ、鳴れよ、驚かすまで！

(かき鳴らす)

いかなる曲をや弾かん、

誰が作をや弾かん、どの詩人のを、

(黙量しつゝありて)

何の曲をや弾かん、どの曲を。

(空中に唱歌の聲あり)

あらあやしいづれより送るぞ妙なる聲、

此方の森の千代の松、風に浮れて

歌ひ出るか、

素。

歌

彼方の雪の巖間より落る雪解の水音が、わが琵琶の音を浮べて

自然なる歌曲よむか。

左なくば天津乙女や降り来て

虚空よりもたらす天歌かも。

歌へかし！ 歌へかし！

さてわが琵琶を合せてん。

(仙姫内にて歌ふ)

きみ思ひ、きみ待つ夜の更け易く、

ひとりさまよふ野やひろし。

彼方なる丘の上に咲く草花を

たをりきつゝも連なき身、

誰が胸にかざし眺めん由もなく、

思はずも揉めば散りける花片を、

また集むれど花ならず。

* * * * *

素

(仙姫過ぐ、二頭の鹿之に随ふ)

怪しきかな、怪しきかな、人の来ぬ！

獣ひとつだに住まぬどころと思ひしに。

さても其の人は、其人は

あやしの光を先に立て、

美しや、美しや山乙女！

やさしめづらしの鹿もどもに。

われけふ迄の長のへめぐりに

この姫のごときを見ざりけり、

前に聞きし歌は、ことばりや

この姫の朱唇洩れし者なれば、

あな知らず顔に過るやわが前を、

露も見ぬ浅芽生に足元珠玉を轉して。

姫

知るや知らずやわが在るを、

何にめぐらしどてか天のみ仰ぐ、

敷ふればどて、よも星の敷は盡じ。

鹿もなごてや心なき、ひい——どの其聲は、

誰を呼らん、誰を戀しど慕ふらん」

(琴を置捨て歩み寄り)

それなる山姫に物申さん、

これは登山のものよ、もの問はん。

あらおどろかさねるよ。

許せかし許せかし、はからぬどころの

めぐりあひ、思はぬ琵琶の合せ歌、

その歌のころ、さて問はで

別れんことをしさに、

無禮とは知れど君留めぬ。」

其聲は人の世のものらしや、こゝは世ならぬ

素

どころなるに、いかにして君、……

まがふ方なく世の人なるよ！ さても

この人の調べやらん、先に聞きし琵琶の

天高く鳴り渡りて、彼所の家のわが住を

迷ひ出で、この原に君に逢ふかな。

恥かしや未熟のしらべごと、

思はぬどころまで鳴りさはきて、

きみが妙なる天津縹のさまたげをしぬ。

さても亦めづらしや

こゝは名にしあふ廣野目も廻に、

幾十里に亘る寂寥を、

きみいかに、ひとりこのわたりに棲玉ふ。

夜は更けて世に聞馴れし夕梵の

鐘の音も、奈良も吾妻も彼方の天、

その天の、あの浮雲の下よ〜

麻にからめる世のもつれ!

さては、さては、わが美しの姫も、

あの世に詛れてや、あやはらからにも離れてや

鷹隼に追れし小鳥かも。

いな、いな、いな、鬼が人として、人が鬼として

左はむごくせじこの花を、この玉を。

ほ、何の怪しむことかは、鬼が人として

人が鬼として、世のものならねば

——愛るもなく、詛ふもなきものを。

はていぶかし、その聲音の

むかしのわが妹に能く肖つる。

わが妹よ、わが妹よ、彼ぞ、彼ぞ、

始めて世のあはれをわれに教へしもの、

狂ふが上に狂はせたりしもの。

また彼のみよ、

われに優しき教へしもの、

われに樂しき覺えさせしもの、

左は言ながら冷渡る

さびしき墳墓に入りてより早や幾とせ。

天が下に新らしきものは無き歳々の

梓弓春の足早み、行く秋の飛鳥川

枯梢枯葉もしがらまぬ。

思ひ思ひ廻らせば

行く水の流れ流れて彼の一葉、今は

いづくの江海に漂ふやらん闇の先き。

或夜寢覺の夢まくら

あどろき起てば、君がすがた

燈火の裡に消え行くを、

呼止かねて明石瀉、

展轉反側る牀の中、

曉の鳥の音、待たれし。

(はるかに牧笛を聞く)

姫、わがわらべならん、あの笛は。

(仙童雪丸来る)

雪、わが姫はこゝに在すか、彼方此方と

索ねくたびれぬ、いざ来ませずや。

(素雄を顧みて)

菜、こゝなる人は何者ぞ?

姫、めづらしき旅の客なる。

雪、あもしろき物語にてもありしや。

素、うゑ、姫君よ、まからふよ。

(姫に向ひて)

曲、さても君が身は、

樂しき境遇ならずや。

姫、左ればよ、自らは樂し苦しを覺えねど、

われに優しき教へしもの、

われに樂しき覺えさせしもの、

左は言ながら冷渡る

さびしき墳墓に入りてより早や幾とせ。

天が下に新らしきものは無き歳々の

梓弓春の足早み、行く秋の飛鳥川

枯梢枯葉もしがらまぬ。

思ひ思ひ廻らせば

行く水の流れ流れて彼の一葉、今は

いづくの江海に漂ふやらん闇の先き。

或夜寢覺の夢まくら

あどろき起てば、君がすがた

燈火の裡に消え行くを、

呼止かねて明石瀉、

展轉反側る牀の中、

日どなく夜どなく野遊びして

疲るゝまではあさりありく。

また疲るれば、

森の樹蔭に自然がしつらへし

草の菴、蓬を被ぎて床となせば、

夜風いさゝか寒しども、

うつくしき樂しき夢のみ結ぶなれ。

紅々と樹落に朝日のうつるとき、

起出れば鹿の集むる

山樹の果香ばし

足らぬときは自らも立出て、

堀りどる草の根甘し。

其は樂しさの極みなり。

わが苦しさに、戀の苦しさに引代へて、

露姫! 露姫! 汝のみが

姫

老ゆるも知らぬ平穩は？

露姫と！

そはいかなる人なりや？

かくすまじ、かくすまじ、

汝こそわが戀人ならずや。

(仙姫も仙童も鹿も去る)

素

喃、喃、待てや露姫！

ひとことだにも、われを思ふと言はずして、

復た新らしき物思ひせよとや。

ひとことをのこせ、われを愛すと、

愛せずや戀せずや、喃、喃、露姫！

腹立しや腹立しや、この琵琶よ、

彼を呼出し汝は罪負へよ、

もふ汝にも益はなし、

うち破りてん、

(琵琶を取上れば鏗然響あり)

否、否、否、汝は破らじ

わが胸の破るゝに任せなん。

第二場 蓬菜原の二

(蓬菜原の道士鶴翁と柳田素雄連立)

(ちて出づ。雲重く垂れて夜は暗黒)

わが眼はあやししくもわが内をのみ見て外は

見ず。わが内なる諸々の奇しきことがらは

必らず究めて残すことあらず。

且つあやしむ、光にありて内をのみ注視た

素

りしわが眼の、いま暗に向ひては内を捨て
外なるものを明らかに見きはめんどぞ
すなる。

暗のなかには思はしきもの這へるを認る、

然れどもおのれは彼を怖るゝものならず、

暗の中には嫌はしき者住めるを認る、

然れども己れは彼を厭ふ者ならず、

暗の中には醜きもの居れるを認る、

然れども己れは彼を退くる者ならず、

暗の中には激しき性の者歩むを認る、

然れども己れは彼の前を逃ぐる者ならず、

わが内をのみ見る眼は光にこそ外の、この

世のものにも甚く惱みてそこを逃れけれ、

いかで暗の中にわが敵を見ん。

暗を厭ふは己れが幼かりしときのみ、

鶴

光りの中に敵を得てしより暗は却われを
隠すに便あるのみ。

今己れが友なる暗に己れの閉ぢくちたりし
眼を圓く開きて、

今日迄おのれを病ませ疾はせたりし種々の

光に住める異形の者の悪氣なく眠れる能を

見る中に、…またおのれは今暗に住める

あやしきものどもの樂しみ遊べるさまを見

る中に、たいひとこと足らぬ心地ぞする。

其はいかなる事ぞや。

世の人に煩累あるは常なり。然れども凡そ

わが道の術にて愈さぬものはなし。

きみが足らぬと言へるはいかなる事ぞ、

語り聞せよ、己れは之を立どころに愈して

素。

われ未だわが足らぬところを愈す者にあはず。そもわが足らはぬはわがそのれの中より出ればなり。世は己れに向ひて空しき紙の如し、その中に有らゆる者はいたづらなるもの、仇なる墨のすさみなれ、然れども己れが目には墨の色は唯だ其のおもてに浮べるのみにて、其の中こそは空しき紙なるをうつすなれ。

われ世の中に敵をもてりき、われ世の中にきはしきものをもてりき、然れどもこはわが世を逃れしよこと理由ならず。

わが世を捨つるは紙一片を置くに異ならず、唯だこのおのれを捨て、このおのれを——このおのれてふ物思はするもの、このおのれてふあやしきもの、このおのれてふ満ち

鶴。

足らはぬがちなるものを捨て、去なんこそかたけれ。

これ、これ若き旅人、その、おのれてふものを御することを難んずるも是非なけれ。わが道の術とはそこぞそこぞ、そのおのれてふものは自儘者、そのおのれてふものは法則不案内。そのおのれてふものは向不見。聞けよかし、わが道術は外ならず、自然に逆はぬを基となすのみ。

そのおのれてふ自儘者は種々の趣好あるものよ、石塊を拜むも彼なり、酒に沈むも彼なり、佳人に楽しむも彼なり、墨に現ずる山水に酔ふも彼なり、意ど同じ書庫に眠るも彼なり、無邪氣のおのれかな、是はわが

素。

道術にて濟度しつるものどもなればなる。世にはまたくさくさの苦しみあれば、われは「望」てふものをわが術にて世の人の懐裡に投げ入れ、なやみ恨めるもの、蒼めし頬に血の色を顯はし、またわが術にて世の、見えずして權勢つよきもの、繫縛をほどく「自由」てふものを憤り慨けるもの、手に渡し、嬉しみの聲を高く擧げしむる。斯くして佛どならぬものはなし。

休めよ休めよ、わが時間は迅きこと彼方の峯を駆けまはる電光に似て、わが誕生どわが最後どは地に近ける流星の火となりて走り下り消え失する暇よりも速く、わが物を思ふは恰も秋の蟬の樹に倚りて小息なき聲を振り立つるが如くにして

鶴。

汝が説く詐調の道にて佛となる可き性ならず。

自由？ これ頑童の戯具のみ！

望？ これ老ひたる姫の寢醒の嘆言のみ！

哲學も偶像も美術も亦美人も、わが身を托する宿ならず。唯わが意は

見よ、あれなる空間を馳する雲なり。

見よ、あれなる峯を包める精氣なり。

雲もなほ己れがまことの願ならず、精氣もなほまこと己れが願ならず、

然はあれども人界どこの「己れ」を離るゝばかり今の樂しき欲望なるべけれ。

あはれなる不満を訴ふものかな。人界を離るゝは、身を人界に置きてもかなはぬ事やある。好し人界を離れ得るども、

素。

汝が如きはまことの安慰ある者ならじ。
 考へよ、蒼穹にも星くずの数は限なく、
 争は日として夜として絶間なく、
 碎かれて、敗られて落ち来る者は
 多からずや、
 好しや汝が光を放つ者となり得て、
 高く彼方に懸るとも、汝の願は盈
 つまじきぞ。

われ願を盈すが欲ならず、われ願てふものを
 苦へず、われ盈つる欲くるを意に止めず、
 唯わが心は、時に離れ間に隔り、
 恰も彼の芒星と呼ぼるゝ君の、
 己れの軌道を、何に物煩なく駆奔る如きを
 こそ樂しまんとするなれ。
 この退屈の世、この所業なきの世、この偽

形の世、この詐稱の世、この醜惡の世、
 この塵芥の世いかで己れの心をひと時息む
 可き。

地のいと穢きほとりに樂しく棲みて夜に入
 れば悲し氣におもしろき音を爲す地龍子を、
 頑童等は鉤の頭に苦しめて、魚を欺むく料
 どなせど、われは世の頑兒が遂に彼に似た
 るを憐れむなり。彼も己れを料らず頑童も
 己れを知らず。彼も其住ところを美しくしき
 家と思ひ、これも己れの宿を此上なきとこ
 ろと思ふ。彼も其聲をおもしろしと夜すが
 ら鳴きつ、これも其情を樂しと短き世に倣
 り。夜の白むまではおのれを見る眼さへあ
 らず。
 おのれは怪しむ、人間が智徳の窓なり、

鶴翁。

希有なるかな。わが術は然らん者
 に施さん由なし。

美の門なりとほめちぎる雙の眼の、
 まことに開けるものなりや？

開かば、いづれを觀る？ まことに開かば
 觀る可きに、おはれ人の世の態を、
 その穢れたる鼻孔を、その爛れたる口を、
 その渴ける狀を、その餓ゆる態を、
 その膿める腸を、その壞れたる内神を。
 聖しとて、氣高しとて、嚴格なりとて、
 萬類の長なりとて傲り驕れる人類は
 わが涙の色を紅になすもの。

いかでいかでわか安慰を人の世に得ん、
 いかでいかで、道師が優しき術にて
 この暴れたる心の風を静め得ん。

素。

汝はおのれを頼みて生く可き者ならず、
 またおのれをたのみて死ぬ可き者ならず、
 わがいましに爲す可き事あらず、
 往きね、往きて汝が心の儘になせよ、
 極樂——地獄——歧は明らかに
 この二道に別る、其の何れをも汝が
 擇ぶまゝならん。

(鶴翁去る)

咄！ わが行く可きどころ
 この二道の外なきや？
 極樂？ 地獄？ 抑もわが
 露姫は何方へや行きし？
 汝が逝にし世は何方？ そこそ
 わが行く可きどころなる。地獄、極樂は
 わが深く意に注むるものならじ。

汝あらば地獄いかで地獄ならん。
 汝なくば極樂いかで極樂ならん。
 わが汝を思ふは戀のいたづら心にはあらず。
 われ、まことに汝なくば笑ふ可き機なければなり。
 露姫！ 露姫！ いづれにあるや、
 いづくに待つや、いづくに臥するや。
 思へば奇しき戀なるかな。

第三場 蓬菜原之三、廣野

素、 われ我心を知る能はず。われわが足の行く

所を定むる能はず。何を願ひてこゝなる荒野に入り來りしや。
 わが願ふところ如何？ わが思ふ所如何？
 大地を開かしめ、蒼海を乾かして、
 過ぎし世々の出來事と、其中に働きたる巨人どもを呼出で、おもしろき物語をなさんか。
 こはわが力ならず。
 然はあれども、然はあれども、これを爲では、
 死せるものを呼活さでは、わが美しくの者、
 わが慰籍の者、わが露姫を
 呼び出づることかなはじ。
 仙姫と化りて其の姿を現はせし露姫、物を
 得言はず、露姫よ露姫よ、きみが妹よと言
 ひ得ぬは、「死」なる惡鬼のつきまどへば
 なり。

われ輕き草鞋に足跡到らぬところなけれど、
 未だひとたびも得踏入ぬは死の關の彼方なり。
 こよひしも、死せる者を呼活ることのいよ難
 からは、われから、好し、死の關を踏踏えん。
 然なり！ 然なり！

(樵夫源六出づ)

源、 其處なるは何人ぞや。
 菜、 われは諸國遍歴の者。
 源、 いづこより來り、いづこへや行玉ふぞ。
 素、 われ來りしところ知らず、行くところをも
 知らぬなり。
 風は北より來れど、其の行くところは南な
 るにあらず、北に歸る可き爲なり。
 われも亦行くところあるに似たれど、
 まことは元へ歸るのみ。

源、 元に歸るとは、いづれに行かふなる。
 素、 知らずや、「死」するは歸へるなるを。
 源、 エ、！ 「死」するは歸へるなりとは！
 彼處の無底坑より微に聞ゆる梭の音を君何
 と聞玉ふぞ。

あれこそは名にしあふ

死の坑なれ。人の彼處に落つるものあれば
 再び還らぬ別れなり。誰れ言ふとなく彼の
 坑の中には美しくしき姫ありて誰が爲めに織
 る衣ならん梭の音。
 ほのかに聞けば彼の梭の音は、
 變はり無き歌を唱ふとむ。
 恨める男のありて、其男の來ん迄は彼の坑
 に梭の音を絶たぬ可しとよ。
 足れり、足れり、もふ説くなかれ、

源、

其の坑こそわが到るべきところなれ。
何を言はるゝぞ、其處は恐しき地獄の道
なるを知り玉はぬや。

素、

否、否、地獄を恐るゝものと思ふや。

源、

恐ろしや、恐ろしや。

素、

何をか恐れん、わが恐るゝところは

世なりかし。死は歸へるなれ、

死は歸へるなれ！

おさらばよ！

素、

第四場 蓬萊原の四、坑中。

暗の源なる死の坑よ！

人生の凡ての業根を焼盡して、人を

善ならしむると聞ける死の坑よ！

吾人の限なき情緒を斷切りて、

黒暗のうちに入らしむると言ふなる

死の坑よ！

善惡の歧を踏みたがへしも踏み守りしも一

様並等に安寂なる眠に就かしむると聞ける

死の坑よ！

われ汝に問ふことあり。

汝が中に、ひとりの姫を、日となく夜とな

く休まぬ梭の音を作しむるはいかに。

いまも其の梭の音は

わが耳を壁裂く如くにきこゆるなる。

曲

菜

蓬

曲

菜

蓬

素、

流石に、暗の源泉なる死の坑の鬼なるかな、
みにくき面なるよ。

汝は何者ぞ。

魅、
われは「死」の使者であるが、汝の間に答へん
とて出で來れるなり。

素、

おもしろし、おもしろし、左らば語れよ。

凡そ死の使者數多あるうちに、われは「戀」

てふ魔にて、世に行きて痴愚なるものを捉

へ來る役目に従ふなり。

われ眞實は君が今視る如き醜くき魅なれど、

世に行きて働らく時は、

希に美しくしき姿と化りて心空しき男女を

尋ねありく、

これに會ふときは、先づ其眼をわが魔術に

て眩ませ置きつ、然して後に其胸に乗入る

なり。わが乗入る後は賢きものも愚になり、

愚なる者も痴賢くなる。

待て待て、さては汝にぞある、戀の魅と聞

きつる鬼は。

素、
鬼よ、われ語る可きことあれば——われ語

(一醜魅出づ)

素。

る可きことあれど、汝が醜みにくき面つら見みては、
流石さすがにわれも語り難むづかきぞ。汝が魔術まじゆつもて暫しば
らく美うつくはしき者ものとなりてわが前に現あらはれよ。
われ戀こひてふものを嫌きらはぬにあらねど、其戀こひ
の本性ほんせいを極きまめぬにもあらねど、止とみ難むづかきは
露姫つゆひめを思おもふの情なさけ！
美うつくくしき戀こひしの姫ひめの姿すがたとなりて、いまわが
前に現あらはれよ。

(醜魅消去りて後なる襖を開けば露姫)
(機に向ひて梭を止む)

露姫よ、露姫よ！

これを二度目なる今宵の逢瀬。

何と物言はぬ。

露姫よ、露姫よ！ わが汝を愛するは世に

言ふ戀にはあらぬかし。

何と物言はぬ。

露つゆよ露つゆよ、わが汝いましを思おもふは、世の物を思おもふ
の情なさけにはあらぬかし。
紅蓮ぐれんたいけん大紅蓮、淨園淨池ありとも、汝いましなくて
われに何の樂たのしみかあらん。

何と物言はぬ。

其のやつれし姿は、われを恨める心なりや。

思出れば

六とせの往日むかしに早はやなりし、世に激げきするこ
どありて家出いんでの心急いそがはしく世をほかなみつ、
己おのれを迷まよひつ如法じよほふ闇夜、

せかし裁たせし旅衣たびころも、

露つゆの玉たまをぬひこめて、袖そでに隠かくる、小櫛こくしをば

踏折ふみぞりて思おもひ残のこすこと

梨子なしの杖つえひとつ、これに生命いのちの導しるべさせ、

をちここにさまよひて長の年月、
小夜月こよづきのおぼろの中に世の態も、
人の態も學まなび學まなびて早はやくも疲つかれぬ。」
戀こひてふもの、綱手つなでの力ちから足たらなくて、
世の荒浪あらかみに流れ出でては捨すて小舟、
寄よせてはかへり、かへりてはまた寄よする
無情むじやうの波なみ。

このわれ何なにどか世よを思おもまんや、
世も亦また左程ひだりほどにはわれを思おもまざ

りし者を、

あやしくも、いつの間やらん、

世はわが敵てきとなり、われは世の仇あだと化なりぬ。

彼かれが寄よするや我われが寄よするや、

誰たが撃つつや鼓つづみ、誰たが閃ひらめすや劍つるぎ、

見えぬが内に恐おそろしき戦たたかひはなりはてぬ。

この戦争たたかひはわれを狂くるはして、

出家しゆつげの旅たびも住家ぢゆがと同じく、

苦痛くるつうの中に悶もだへしめ、ひとの樂たのしみはわが樂たのしみ
ならず、ひとの榮譽はまはれはわが榮譽はまはれならず、人
の慾よく、人の望のぞみは、わが慾よくわが望のぞみならず、人
の喜よろこび、人の悲かなしみはわが喜よろこび、わが悲かなしみならずなり
ゆけり。

今更いまさら思おもへば譯わけも無なき

人の笑わらひも泣なきもせぬところに、われは
おどがひ解とけもしたり血涙ちのみたなみ流ながしもしぬ。」

露姫つゆひめ！ 露姫つゆひめ！ 何と物言はぬ。」

秋風あきかぜの松まつの葉は越こしに鳴なる聲こゑを聞きけば、きみが
終はつりを音信おとづるるなりけり。

悲かなしやな、悲かなしやな、わが胸むねに

これより凍こつく冬氷ふゆこほり

早や散りたまひしか、
正木のかつら幹離れ、
招きもせぬ秋は疾く寄せて葛葉の翻々と落ち散りたまひしか、あな無残!

露姫! 露姫! 何ぞ物言はぬ。」

散りにし後の露姫は、魂魄わが旅寝の天に舞ひ来らで、

いな来りしかども、夢にのみ。

いづくの宿に身を置くなる。

浮世の旅の修行の間を、

しばしは離れ垂くとも

いつかは元の比翼の空、

高砂の尾上の松を下に見て

連れ飛ぶべしと思ひきに、

げにつれなき別れなりと。」

露姫! 露姫! 何ぞ物言はぬ。

(露姫後を弾)

(きて歌ふ)

露、

露なれば、露なれば、

消え行く可しと豫て知る、

露なれば、露なれば

草葉の陰を宿と知る。」

露なれば、露なれば

月澄む野邊に置く可しと知る、

露なれば、露なれば

ひとたび消えても再た結ぶなれ。」

露が身を戀しと思はし尋ね来よ

すみれ咲くなる谷の下みち。」



素、

第五場 蓬萊原の五。

(素雄懸瀑に對する崖徑に立つ)

雪解に層める瀑水何を憤りて轟ろきわたれる。

まろび落ちころげ下るたきつ瀬何を追ふて

電火よりもはやく落る。

湧き騰り捲登る瀑烟何を包まんとして狂ひま

はれる。」

われは見る、白龍の水を離れて奔躍跳舞を。

白龍! 白龍! われ汝稱ぶに、

暫し静まらずや。

われ興無き世に生れて、幽鬱を友

とする故に、

あたりに騒々小鳥の聲もわれを

慰むる者ならず。

また孤棲山の奥にも、わが心には休みなく

騒がしき響の絶ねば

聲なく渡る杜鵑も、わが耳には百雷合

せて落る如くにて、

長き夜をまばたき少なく窓を睨みて

わが身の滅びを近寄せし。

滅びもわが物ならず、招けば背を向けて走

るまどろしさに、

われ己れを促しつ世の繩を断切りて、

美はしき自然の中に入らんとせし。

自然も亦われを迎へず喜ばず罵りて言へ

り、死す可き者よ、何ぞ夙く死なぬと。

白龍! 白龍! 今汝を囁まん事あり、

むごく悲しく世のあらゆる者に捨られし

このわれを、汝こそわが友なれや、抱きて

渦まき怒れる底無き水に伴はずや。
龍よ龍よ、鬼に従はず神に従はぬ龍よ、
われ、このわれを汝に任してむ。

(黙坐稍久し)

(雲を開きて月皎々と中天に)

(照り、雄鹿雌鹿相追ふて崖)

(を登り來り、續いて仙姫も)

(蘿にすがりて登る。)

素、

美なるかな、美なるかな、白玉の盤、
美なるかな、美なるかな、清涼宮、

月輪よ、汝を思ふごとに、見る毎に、

雲に棧橋なきを怨むかし、

暗き夜の寒き衾、

浦のしほ風吹くときに、

われ汝を招びてわが琵琶を

夜と共にかなで明せしこといくそたび、

今もわれ、命ずることを白龍聽かず、

白龍聽かずして、わが胸に

汝に聞かす可き訴ごとの積り起りぬ。

いでわが琵琶に。

(仙姫歌はんとす)

其の歌は誰ぞや誰ぞや、

歌へや歌へや、其聲は戀しき者なり、

其聲は、わが琵琶の暮ふ聲なり。

(仙姫の歌)

美しくや大空歩むひかりのひめ、

物をおそれずひとりたび、

星をあたりに散り失なせ、

雲を行手に消えしむる。

われもひとり住むなり、この山に、

姫、

寂しと思ふけふこよひ、

松が枝傳ひて降り玉はずや、

かたり明さむ短夜を。」

羽衣無き身をいかにせん、

君を戀ふとて舞ひ難し、

つばさ並べて舞ひたらばと

仇し思ひぞ是非なけれ。」

大空たのしき旅なめれ、

こゝにも樂しきことぞある、

來まさずや、來まさずや、わが洞に、

草花束ねてまゐらせん。」

月や聽かぬ、いたづらなる願を

するかな。松が枝悪くし

其陰に、光を残して入りにけり。

左らばわなみも洞に歸り、

寝待ば明日の大陽は出でん。

鹿よ左こそ疲れけめ、

こよひのいとま取らしめん。」

(雄鹿雌鹿去る)

(素雄仙姫に歩み寄りて)

仙姫よ再び逢ひまゐらする。

先程の旅客ならずや、いといとふ悲しき顔

色におはすはいかに。

然なり、われ白龍の騰降するを見て、已

れを連れて水底に沈めよと命ぜしに聽かず、

われ月を見て君が歌ひしごとく、雲に棧橋

を得て登り行かむとすれども得ず。

猛落つる瀑浪、岩根を搖ぎて碎け碎け湧く

うしほ、これを見る己れが胸も其の如く、

内の亂れ故に、外には悲しき溢るゝなれ。

然れども、然れども、わが悲を拭ふ道なきにわらず、拭ふ道なきにわらず。
其はいかなる事ぞや。

素、

姫、

露姫なる！ 露姫なる！ 己れが悲を拭ふ可きものは。

仙姫よ、仙姫よ、露姫は君に其儘似たる者よ、仙姫よ、仙姫よ、君は其儘露姫なるよ。

露姫！ 露姫！ わが汝思ふ心知らずや。

いましなくてはこの琵琶も、この琵琶も悲さを鳴るのみなる。

この琵琶が招び出たる仙姫は

露よ、露よ、いましに甚く似たる。

いましならぬか、露よ、露よ！

姫、

其の露姫に似たると云ふ、

君が戀人に似たると云ふ

素、

姫、

わなみも今宵は、何故か寂しき心地のする。何ぞ寂びしとは言ふ。

寂びしと思ふ心地けふまでは覺えざりし。何故とも知らず寂しきなり。

わが洞には焚火の用意もあり、今朝集めし、よもぎもあれば……

いざまれびとよ來れかし、

來れかし、來れかし、ためらはで。

第三齣

第一場 仙姫洞

(素雄仙姫洞の外に立出て)

素、

眠！ いましをあやしきものと

今ぞ知る。何ぞ仙姫にのみ臨りて

われには臨らぬ。

いまし來らねばわれひとり夢の如くに

醒めてこの洞のうちには得堪へぬ心地

すなる。

こゝに立出ればむら雲の、

行衛も知らず月のみさえまさりて、

草も花も、樹も土も眠らぬはなき。

眠！ あやしきはいましなり、この原の

なべての物を安ませて、何ぞわれひとり

を安ませぬ。」

なほあやしきは露姫なり、我が安まぬ

胸の彼には通はずやある、彼がむかしの

戀はいかにせし？

眠てふもの戀の友ならじ、彼れの戀、

ありしまゝなれば、いかでおのれを

斯くまでに寂しき洞に覺めて

あらせん。

(素雄再び洞に入る)

さても美はしや仙姫、いづこの寶の

山よりぞ、このめづらしき珠玉を取りもて

來て、誰がたくみの業にてや彫り成せるぞ

この姫を？

蔽へるよもぎのなくもがな、蔭なせる

松の樹梢をば残りなく折り去りて、満々

たるあの月をこゝに下し來りて

天が成せる眞の美をしらべ盡さまし。
 堅く結べる其の花の口元には、時代をし
 知らぬ春含み、
 其唇頭にはしのゝめの、丹き雲を
 迷はせり。
 黄金のかたきもいかでかは、其の暖かき
 吐氣に會ふて解ざらん。
 緩くは握れど、きみが掌中には、盡ぬ
 終らぬ平和と至善、
 かたくは閉づれど、きみが眼中には、不老
 不死の詩歌と權威をあつむるとぞ
 見ゆる。
 黒髪のひとつ節二節、きみが前額には
 天地に盈つる美を凝らすとあぼし。「
 靈ぞ神ぞ、おごそかなる！」

抑も誰やらんこの姫は？ わが露姫
 か？ いな、われ然らぬを悟りぬ。
 然らぬか、然らぬか、わが露姫の姿なるを
 いかにせん。
 是幻なる可きや？ これ現なる可きや？
 これ實なる可きや？ これ偽なる可きや？
 わが想と、わが戀と、わが迷とが、ともに
 わが爲のたくみとなりて
 この原に、露姫を、この原の氣より
 つくりいでしや？
 誰知らぬものぞなきわが想の態、戀
 の態、迷の態、悪魔、わが敵なる悪魔
 まで 詳にこれを知るならぬ。
 悪魔、彼か、こゝに露姫を活し出しは。
 然れどもこの露姫はもとの露姫ならず、

わが戀せし露姫は斯る情なき姫には
 あらざるべき。
 (あたりを見廻して)
 笑止、笑止、誰に科あらん、われを迷はせし
 もの、このおのれの外ならぬに、われを眠
 らせぬもの、このおのれの外ならぬに。
 逝ねよ逝ねよむかしの記憶、戀てふ
 魔魅に、このおのれを、あたり卑下なる
 迷問の僕となすは悲し。
 戀！ いましとわれといかばかりのちなみ
 かある？ いくたびか汝を退けて、わが
 肉を腐らすもの汝なれど罵りながら、
 この身いつしか汝が愛しき朋と
 なる。 いまし故には、地獄と極樂の
 境に咫尺を辨えぬ霧を重ねる

ことを常なる。
 露姫起きよ！ 露姫起きよ！
 見よ、この露姫は性なき珠なり。
 露姫！ 露姫！ 何ぞ起きぬ。
 何が故に眠る？
 安息てふもの、汝が無意無慾の世
 には用なかる可きに。
 何を夢見て眠る？
 世の煩累も戀のもつれもなきいましてが
 仙棲に。
 何を樂しみて眠る？
 憂悲のひまにしばしの慰藉を求めて
 うつくしき嬰兒になる爲ならで。
 眠れよ人よ、眠れる人よ、抑も誰がためぞ、
 その快よげなる莞然る顔容は？

露姫か、あらぬか、抑もわが戀人か？
あらぬか？

わが暗に求め、光に呼び、天にあさり地に探れる露姫は、

このくるしき胸の、亂る、絃をおさむる者にはあらぬ。

(高らかに笑ふ聲松樹の中より起る)

叱！ 何者ぞ？ そも眠れる天地の

寂寞を破りて怪しき笑ひ聲をなすは？

(松樹を傳ひて降れるは一青鬼)

青鬼、われよ、おかしさに得堪へて笑ひし者は。

素、何者ぞ、何者ぞ？ 鬼か、鬼か、

めづらしや。

さても汝が顔色の蒼く苦きことよ、

何に悲しきことありて然はなれる。

其は後に更に問はん、抑も何が故に
わが前に笑ひしぞ。

青鬼、わが笑ひしは、いましが爲すこと、あまりにあかしければなり。

素、何が故におかしきや。

戀てふものを知らずや、わが狂へるは、事故なくしてならず。

青鬼、戀とはいかなる痴愚を迷はす雲ならん、

其雲の中に迷へる者を見る毎に、

われおかしさに得堪へて思はずも笑ひ嘲るなり。

人之れを呼びて神聖ものとなす。

是をよるこばぬものなく、これを願はぬものなし、その爲すところを見れば暗きあたり

りに手を取合ひて、

きみなくばわがいのちもなにかせんと言ふに、答へてわれも亦きみ故にこそながらふれど、愚なるかな、明朝は死ぬ可きいのちを、戀てふものに一夜を千歳も更らじと契ること。

われ數多き小女の、小暗き窓の下風の通ひ

もせぬあたりにて人に知れぬ露の玉をこぼ

すを見き、これを問へば戀ゆえと。われいく

千度少年の悲し氣の面して、燈の油盡きに

しあどに膝を組み思ひを廻らす者を見き、

これを問へば戀ゆえと。

また山をも抜きたる喜にやと思はるゝ程

に傲り樂しむ者を見き、これを問へば戀の

成りし故ぞと。

死するも生くるも戀故に、春も秋も戀故に、

泣くも笑ふも戀故に——其戀てふ者は人を
樂しますとは聞けど、わが見るところを言
へば、樂しますにあらで苦しみますなり。假な
る、偽なる、まぼろしなる戀てふもの故に
——人の美はしき顔は價なき動物のひとつ
と見ゆるぞあはれ！

素、扱は一度も戀てふものを味はぬ鬼よな、汝

が蒼き面にては、誰が戀衣縫ふおろかをせ

ん、何ぞ變化の術をもて、美しくしき男となり

て、世に來り、優しき乙女の門に立たずや。

青鬼、戯むれぞ、われ戀てふものに狂ふ愚ならず。

わが婦を見るときは、其の何が故に優しき

かを疑はぬ事なし。

美なし、情なし、わが胸には。いかで汝が迷

へるこゝろをくむを得ん。

來よ、この仙姫を呼覺して彼が戀心いかならんを尋ねべし。

(素雄推し止め)

素。

其仙姫はわが物なれば汝が荒さべる手を觸けしむること能はず。眠れるひとよ、眠るうちに怖ろしき夢をや見ん、これも是非なし、わが戀人よ、われは今去可きぞ、今去可きぞ、眠れよ眠れよ、覺むること勿れ。

(素雄行かんとし、鬼を顧みて)

鬼よ、來れ、汝と共に山に登らん。

青鬼。

山に登ることは、鬼と魔の外かなはじ、汝いかにして登る權を得んや。

素。

あるかや、われ人の世に屬とは言へども風を御し雲を覆むことを難しとする者ならず。

青鬼。

然れども汝は塵の見なり、いかでか精なる

ものゝ爲る業を爲し得ん。

素。

われ塵の見なりと雖、塵ならぬ靈をも持てり。この靈を洗ひ清めんために、いで御山に登らん。

青鬼。

然らばひとり行きぬ。われは止まる可き。

素。

何ぞ行かぬ？

青鬼。

御山にはわが權の元なる王住みて、われには山の根を守れと命じ玉ひて登ることを許されず。こゝには、鬼と魔が身を養ふ可き、氣の中の物——

(そも鬼の食ふものは見ゆる肉にあらずして氣の中に流るゝ精なればなり)——

を得ること易からずして、わが軀を肥すに由なく、いたづらに世のおかしき者を、多く見て多く笑ふのみ。

素。

左ればこそ、いましが顔の蒼ざめて見ゆるなれ。實にあはれなる鬼よ。

鬼の中にも汝が如き幸なき者を見るはわが期はざりしところなる。

然れども貸す可き力なし、われも鬼の世に

わが爲す可きところなく、汝も鬼ならぬわれに借る可きものはなからん。

往け、樹蔭に入りて再び形なきものとなれよ。

然れども、われ必らず汝を誡めん、この仙姫を覺ます勿れ。

(青鬼は樹に登り、素雄は去る)

然れども、われ必らず汝を誡めん、この仙姫を覺ます勿れ。

(青鬼は樹に登り、素雄は去る)

第二場 蓬萊山頂

(柳田素雄山頂に達して四望眺矚する所)

大地は渺々、天は漠々、

三界諸天の境界明らかなり。

萬景萬色一様になりて廣がりつ、

山河都邑無差別夜陰の中。」

六道八維雲に隠れ雲に現はれつ、

凡てわが脚下に瞰あるすなり。

鐵圍——金剛——須彌——幻現二界の中に眺る。

無邊無涯無方の佛法も、玄々無色の自然も、

この靈山に於てこそ悟るなれ。

こぞかしき小鬼！ 無益ある世の智慧！

大地大ならず、蒼天高からず！

我眼！ 我心眼！ 今神に入れよ、

この瞬時をわが生命の鍵とせん。」
いで御雪を踏立て、彼方なる危巖の上に立
たむ。

(危巖の上に登る)

(雪崩の響凄まじ)

大地今崩壊るや?

用なき大地今崩壊や?

くづるも惜からず、いな、いな、いな、
聞くは雪崩の響なり。」

(俯瞰して)

底は見えず断崖幾千仞、

誰が立掛しぞこの壁を。

鬼神とても、よもやこゝをば飛登らじ、

電光とても鳴神とても、この山側には
住まざらむ。

思へばわが身は羽毛ならぬに、
雪さへ積れるこの巖の、角に
立つとは如何、如何。

人か? 神か? 人の世は夙く去りて
神の世や來れる?

神ならねば、いかで、この業は?

神かわれ? われ神か? 咄!

咄! いかでこのわれ!

依々形骸あり! 形骸、形骸!

塵の形骸! 昨日の儘の塵の
形骸! 咄、なほ人なる。

われ神ならず。天地の神は父なる。

いで父を呼ばむ、神を祈らむ。

(巖上に危坐して祈請す)

天地に盈つる靈、照覽あれ照覽あれ、

第一
鬼王、

素、 誰ぞ、誰ぞ、おろかど嘲るは?

日を鑄り、月を圓めしもの、耳を傾け玉へ、
われ世の形骸を脱ぎ去らんと願ふこと久し。
靈山に上りて、魂は、魂は淨められしかども、
未だ存る形骸やわが仇の巢なる。
惡鬼夜叉に攻め立られて今迄の生命は、長
き一夜の、寝られぬ暗の中。
脱去らしてよ、この形骸、この形骸!
雪ぐ可き恥辱の山高み。
拂ふ可き迷の虚空廣み。
形骸ゆゑぞ、形骸ゆゑぞ、
脱去らしてよ、この形骸、この塵骸!

(鬼王三個部下若干を率ひて出づ)

(素雄飛起きて)

素、

第三
鬼王、

鐵黙! 小鬼共! 神に背きて
投ふぞ、ござかしき少年思ひ知らせでは。
(小鬼共此然笑ふ)

第一
鬼王、 われよ、このわれよ、さても愚の片!
塵にて造られながら形骸を厭ふとは。
往け、往け、再び世に還りて
草小屋の陰に隠れよかし。
咄! 罵るか、生々しき鬼奴!
第二
鬼王、 愚ろかなる物! 静まれや!
この山の魔に従はぬか、
この山の鬼の眷族にならずや。
素、 叱! 惡鬼われを知らずや!
義の兒ぞよ! 汝とは異なる性ぞよ!
蹂躙れ! 蹶踢せ!
紛末にして、細塵になして、地下に
投ふぞ、ござかしき少年思ひ知らせでは。

第一
鬼王

人を誼ひ、世を逆行かす白徒！
さばきの日を待ちて、汝を、汝を、熱火に
投げ入れふぞ。

怪しきかな、この靈山に惡鬼を見んとは、
左ては靈山も頼なき禿李になり果しや。」

(小鬼共再びどつと笑ふ)

神とや？ あるいはなるかな、神なるものは
早や地の上には臨まぬを知らずや。

われらの主なる大魔王、こゝを攻取りて
年経たり。

汝がごと愚なる物は悶へ滅びさせ、

かしこきものには富と榮華を給ふことを知
らずや。

さばきの日とや？ あるいは不懲なるかな、

けふこのごろの裁判を知らで、いたづらに

頸延べて知らぬ未來を待つや。」
煩はし、汝が如き、わが言葉敵ならず、
往け、われ魔王を待たむ。

往け小鬼ども！
小鬼のしれもの奴、生ざかしき漢、
諸共に撃ち碎きてこの岩より投ふぞ。

いざ、いざ皆のもの——來れ、來れ。」
(大魔王出づ)

大魔王

またしても小鬼共の働らき立、無益く、
うち捨てよ、引去れよ、鬼共。

この男、塵とは言へど面白き、
骨のあればぞ、こゝへは呼びしなれ。

早や往け、引き退けよ！
鬼王共、王のおほせぞ、

わが大王のおほせぞ、みな慎みて聽けよ、

大魔王

おかしやな、おかしやな。
王侯貴族は、珍寶權威を得れば、
勇み喜びて世を此上なき者と思ふ。

高估は黄金の光の輝々を見れば、
苦もなく疚もなく笑ひ興して世を渡る、
農家は秋の穂並の美しくしきを見れば

濁酒三杯の樂しき忘れずと言へり。
少女は賤の夜業の小唄のかたはらに

戀のさゝやき聞くことを
またなき憂晴しと思ふなる。

少年は目元涼しきをどめの肩に
寄りつゝ胸の動揺めくを、
天が下に唯一の極樂と思ふなる。

然るに怪しきは汝なり、何を左は苦しき悶
ゆるぞ。」

大魔王
素

萬づ世に生きよ、わが魔王！
萬づ歳、萬づ歳君が物なれ！
(鬼王小鬼皆去る)

塵！ われを覺ゆるやいかに。
然り、汝は山門に現れし者よ、
聲のみは彼處にて聞きし。

汝がこどほわれ始め終り盡な知る、世を憤
り、世を笑ひ、世を罵り、世を去り、戀人
を捨て、なほ足らずして己れの滅を欲ふは

懲然塵の子かな！ 抑も何故に斯くはなり
し。

わが悲しみは、魔王よ、汝が知る所ならず、
わが憤は、魔王よ、汝が喜び躍る所ならず

や、わが笑ふ者、わが罵る者、人生の深き奥
を思ひ念らせばなり。

素、

凡そわが眼の向ふところは浮世の迅速き樂事にあらずかし。
 望にも未來にも欺かれ盡してわが心は早や世の詐網を坐して待つ忍耐を失せたりける。始めには樂しと思ひしこと、後には其の後面をのみ窺ふ習慣となりつ、
 自然にわが眼、塵の世を離れて高きが上に彌高く形而上をのみぞ注視ける。われに大鵬の翼なくとも能く世の雜紛を擲きて、蒼穹に精魂を舞ひ遊ばしめし。わが精魂の蒼穹に舞ひて心地はつかに清しくなりければ、わが苦める顔色も和らぎて——茲に始めて嘗むる戀の味。あだかも百種の草花一度に咲ける花園に、われと彼、彼とわれ、抱き合ふて歩める如く。この世の中に、思

はしき地獄を排して、一朝に變れる極樂園。然はあれども、世の極樂は長からず、忽如に惡鳥花を啄み去り、暴風も草をなぎて行けり。
 戀てふ者も果なき夢の迹、これもいつはれるたのしみと悲しみ初にき。」
 大魔王。さてもさても怪しき漢かな、
 語れよ、語れよ、息まで語れよ。」
 素。おもへばわが内には、かならず和らがぬ兩つの性のあるらし。ひとつは神性、ひとつは人性、このふたつはわが内に、小休なき戦ひをなして、わが死ぬ生命の盡くる時まで、われを病ませ疲らせ惱ますらん。
 つら／＼わが身の過去を思へ回せば、

光と暗どが入り交りてわが内に、われと共に成育て、
 このふたつのもの、たがひに主權を争ひつ、屈竟の武器を装ひて、いつはつべしとも知らぬ長き恨を醸しつあるなり。
 この戦ひを息まする者「眠」てふ神女の贈る物あれど、眠の中にも恐ろしく氷の汗をしぼることもあるなれ。
 眠はた長き者ならず、起出れば野に充つる小幟大旗、山を崩す軍叫喚、
 鳴神の銃の音、電光の劔の火、
 外の敵には、露懼るゝこと知らぬ我ながら、内なる斯のたゝかひには、
 眼を瞑ぎて、いたづらに胸の中なる兵士を睨むのみ。」

大魔王。説くなかれ説くなかれ、
 さても愚なる苦しみな。われ其たゝかひを止め汝を穩やかに、樂しき者となさん、
 いかにも。」
 素。汝が力にて能はゞおもしろし。
 去らば來よ、彼方の巖に登らん。
 大魔王。 (兩個歩み出て彼方へ登る)
 暫時爰にて眺めて居よ、わが再び還り來ん迄は、おさらばよ！
 素。 (大魔王去る)
 おやしき魔王かな、こゝにて何を見よと謂ふや。天の美か、地の和か、われを靜むる者いかに。
 素。 (俯し覗みて)
 あら間近なるあの烟は？

燃上る、あの火は？ 其色の白き黒き、赤
 き青き入雑れるは、何事ぞ、何事ぞ！
 あれ、あれ、あの火は都の方よ！
 都よ！ 都！ 都のいつの間にかこの山の麓
 に移れりと覺ゆる。
 その火！ その火！ 都！ 都！
 みやこ！ さてもわが呱呱の聲を擧げしと
 ころ。
 みやこ！ わが蹴れしところ、無邪氣なり
 しどころ。
 みやこ！ われを迷せし學の卷も、わが狂
 ひ初めしいつはりの理も、
 わがあやまりし智慧の木も、親しかりしもの
 も悪かりしものも、そこに、
 あれ、あれ、あの火の中に！

さてもあの白き火は？
 これは出づ、高厦珠殿の間より、
 さてもあの黒ろき火は？
 これは群籍寶典の真中より、
 さてもあの赤き火は？
 これは酣醉蹈舞の際より、
 さてもあの青き火は？
 これは茅屋廢家のかたはらより、
 陰々陽々曖々憺々、烟となつては火に還り、
 火となつては再た烟となりつ、
 立登り立騰る——虚空もこげて星も落ち散
 る、物凄や〜。
 あの火の下に、あれ、あれ、何者ぞ？
 (巖の極角に進みて)
 あれ、あれ、わが住馴れしあたりは早や灰

となれる、早や、早や灰よ、灰よ！
 むかしの家はなく生命の氣もなし、
 むつみ遊びしものも優しかりし乙女子も、
 わが植たりし草も樹も、
 ひどつは鬻體となりて路に仆れ、
 他は死の色に變れる。あれ、あれいまはし
 や悪鬼ども灰を蹴立て、飛びつ躍りつ擧ぐ
 るかちどき、
 白鬼、黒鬼、赤鬼、青鬼、入り亂れ行き違
 ひ、叫びつ舞ひつ、鼓撃ち跳ね遊び、祝ひ
 歌唱ひ、酒筵ひろげ、酔ふてはなほも狂ひ
 躍り、
 落散る骨をかき集めて打たしき、
 まだ足らぬ、まだ足らぬと
 つぶやく聲のきこゆる。

嗚呼、わがみやこ！ あれ、あれ、みやこ！
 捨てたりとは言へ、還へるまじとは言へ、
 わがみやこ、悲しきかな、あの火！
 無殘、限りなき人を
 晩からず盡な灰にす可きぞ。」「
 いづこにや隠れし妙なる法の道、
 いづこにや逃れし、まこと世を愛る人、
 あの火に燬かれしか、はた恐れて去るか、
 あなや！ あなや！
 (大魔王再び出づ)
 大魔王 何にを左は悲しむぞ。
 素王 あそろしき世の態を見ればなり。
 大魔王 何ぞ左は悲しむぞ。
 素王 出でしどて世はわがまことに悪む所ならず、
 まことに忘れ果る所ならねばなり。」

蓬

菜

曲

大魔王

(大魔王からくど笑ひて)
おろかやな！世は笑ひつ泣きつ消え行くに、
汝ひとり忘れぬとや、忘れぬとや。

神とし尊崇るもの此世にては早や
權なきを知らずや。

素

あれ、あれ、あの火の中には、神も佛も、よ
も住まざらん。

大魔王

住まざらんとはおろかなり、神より疆きも
の、彼に打ち勝ちて、彼の權威を奪ひ取れ
るを知らずや。

素

其は誰ぞ、何物ぞ？

大魔王

其疆き者を知らば汝は降り拜くや。
尊崇て汝が王となすや如何。

素

もとよりなり。

大魔王

そばわれぞ。 罪の火をもやして白き黒き

赤き青き、その火を以てこの世を燒盡さん
とするものわれぞ。

人を、世を、灰と化し、昔の塵にかへすも
のは、斯く言ふわれぞ。

火を、風を、電火を、鳴雷を、洪水を、高
き山を、ひろき海を、思ふが儘に使ふもの、
斯く言ふわれぞ。

暗をひろげ、死を使ひ、始めより終りまで
世を暴し、世を玩弄ぶもの斯く言ふわれぞ。

ひれふせよ今、ひれふせよ、塵！

(素雄黙然)

大魔王

千萬の小鬼大鬼を随へて雲に乗り風に鞭う
ち、雨に交りて天上天下を横行するもの斯
く言ふわれぞ。

俯伏せよ、ひれふせよ、降らずや。

蓬

菜

曲

大魔王

いまだ降らずや、

(素雄なほ黙然)

汝が通例ならぬ膽あるを見て、こゝへ召寄
せ、わが鬼の頭のひとつりとなさんと思ふに、
いまだ俯伏さずや。

(素雄なほ黙然)

いまだひれふぬ。
さらばわが魔力もて滅さんに、
火に投入れて灰となさんに、
なほ降らじと思ふや。

(素雄奮然として立ち)

素

叱！ 惡魔！ 狂ひぞ、狂ひぞ、

汝が雲の住居、汝が飛行の術、汝が制御の
權はわが友とするに足ど、
限なき詛ひの業、盡くるなき破壊の業は過

大魔王

去未來永劫の我が仇ぞ。
口さかしや！ 降らずや！

素

降れとや、あな、けがらはし天地の盡くる
迄は、汝とわれと睦む時あらじ、

往け、往け、往かずば、わが眞如の劍の
鋒尖を見せんか、いかに。

あもしろし汝が滅の力。
試みよ、今まこのわれに。

大魔王

滅ぼすは易き業なれど、滅ぼすは、
滅ぼすは、泡沫を消すより迅速けれど、
流石に、汝を滅ぼさんは。

降れ、降れ、も一度思ひ念らせよ。
いまだ往かぬ、いまだ降れと言ふ、

素

穢らはしき魔、咄、惡魔、思ひ知らせでは。
(大魔王大笑して去る)

素。

あやしわが眼、自然に見ずなりぬ、
明相無明相にまだ、きもせず開きし我眼。

魔聲、わが力知らずや。

素、あな魍魎、毒魔、わが滅盡の業を、いまはじ
むるや。

いで、いで、この鐵拳にて戦はんや。

あらあやしわが腕動かすなりぬ。

蓬

魔聲、わが力知らずや。

素、口惜しや、口惜しや、あのれ惡鬼われを玩
弄ぶや、左らばわが脚を擧て蹴らんや。

あやし雙の脚しびれて立たず。

曲

魔聲、わが力知らずや。

あはれのものかな！ 思ひ知れ！

いざ行かん、空しく時を費やしけり。

あさらばよ、塵！

素。

(素雄眼を瞬開きて)

いかに、いかに、重くかゝりし雲に縫はれ
し天の門開らけ、清く流るゝ天の河。

いかに、いかに、わが眼の再び物の色を別
ち、脚も立ち、腕も動くぞうれしき。

見へず早や、あのいまはしき魔、魔よ、魔
よ、いづこへや往ける。

無念骨髓に透りて、御雪には熱を催せしわ
がふところより 迸り出る凍れる血。

無念、無念、われなほ神ならず靈ならず、
死ぬ可き定にうごめく塵の生命なほわれに
纏へる。

事問はん、その「我」に、いましが
行く可きところいづこそぞ？

世か、還るか、世に？

蓬

茶

曲

世に還らば、いづこに住みて、いかなる業
をやなす？

嗟、吁、わが還へる路には、猛虎あり、毒
蛇あり、猛虎毒蛇わが恐るゝ所ならず、然
れどもわが戦ふを好まぬもの、戦ふを好ま
ぬにあらざ、わが性は戦争に習れぬなり。

世よ、わが行きて住むべき家ありや。

世よ、わが還りて爲すべき業ありや、世よ、
汝しが曾て與へし古寺の朽ちし下壁の、蝠
蝠と共なる巢は、「寂寥」を宿すには足れど、
この暗幽に眠らぬものには一夜をも送らる
べきどころならず。」

われ世を家とせず、世よ汝もわれを待
ぬ可し。

わが家いづこ？ わが行くところ？

咄！ 咄！ 魔、われをいかにせんずる。」

見あるせば限知られぬ山の底、

あやしき火や登る、そこよ、そこよ、

わが行く可きところ、そこ地獄。

死の水の流は速し、そこよ、そこよ、

わが筏あるさん、そこよ陰市道、

この身、生きて甲斐なし、ありて要なし。

思ひ極めて、いで一躍して捺落の真中に！

風の如く、火の如く、雷の如く、流星の如く

落下らんや。

さもあらばあれ、粉となれ、塵と化れ、

舞下らん！ 舞下らん！

思へば安し、もとより塵なれ。

世のおきて亂し、世のさだめ破るものわが
後に生れざれ。

蓬

素。

いま去らん、消え失せん、世の外に。
(一躍巖を離れんとする時)
(樵夫源六走來りて抱止む)
誰ぞ、誰ぞ、何者ぞ、われを止めていかにする?

源。

待ちね、待ちね旅人。
樵夫ならずや、いかにしてこゝへは來し。

菜

源。

またいかなればわが死を止むる?
危ふかりし、危ふかりし。そこは險し、迂り落ちては……此方へ此方へ。

素。

いなよ、この世はわれを苦しめ、また欺むけり。われを無からせんとせり。
いかで長く留るべき、早や興なければ。
見よ、世の方に燃へさかる火。われいかにながらへん、今こそ時なれ、死ぬ可き時。

源。

見よや彼方におもしろく翼張る者あり、あれ、あれ、あの鳥、あの鷲。このわれ、いかで劣らん、いでひとあどり、奈落への旅路急がん。

(源六素雄を捉へて動かせず)

素。

あわれ旅人のむごく狂ふかな、おそろしやこの頂より舞下りんとは、しばし、みやこ人、しばし静まりてよ。
こはいかに、こはいかに、何ぞて、左はもがくらん。
なだめぞ、なだめぞ、虚偽のかたち、汝も小鬼のひとりなるべし。
思へば人誰れか鬼ならぬ、美しくしき顔なるも、柔しき態なるも、いみじき言吐くも、けだかき行ひするも、おこそ

蓬

菜

曲

素。

其はわが琵琶ならずや。いかに、わが精神

源。

おそろしく狂ふかな。さても旅人よ、この琵琶を覺へずや。わが鬼ならぬはこれにても知りたまへ。

かに説くも、あらたかに論ふも、優なる舉動も、清らなる意も、外こそは神なれ、内は鬼なる。
人は皆な鬼なるか、

わが見しごとく灰の中にときめけるものどもは人か鬼か、鬼ならん、鬼ならば人ならん、人ならば鬼ならん。
往け樵夫、われ鬼の世には還らじ、知らぬ地獄にはまた樂しきこともあらん。

(源六素雄が仙姫洞に)
(遣せし琵琶を取出て)

のいとも親しき者ならずや。
(一滴の涙凄然として落つ)
いかに、いかにわが琵琶よ、わが爲に、いかなる音を鳴らんとする、そも此處に。
琵琶よ、わが亂る、胸は汝が慰藉の界を踰えて……果なし。
見よや、われを納むべき天は眺るが内に高きより高きに、蒼きより蒼きにのぼりのぼりて、わが入る可き門はいや遠み。
見よやわが離る可き地は、唯だ見る、蚊龍の背を樹つる如く怒濤の湧く如わが方に近寄り近寄り、埋めんとす、呑まんんとす、その暗き墟に。
琵琶よ汝を伴なふて何かせん、汝を頼みて何かせん。

わが精神の、わが意情の誠實の友なりし
わが琵琶よ、早や用なし。
清くいさぎよき蓮華の上に、汝を携へて、
浄土の快樂長からんと思ひしことはいつは
りなるかも、實にいつはりなるかな。
いまは早や汝のいとま取らす可し、
わが埋もる可き世の奥なる地獄の地に、汝
が通ふ道あるやいかに、疑はし。
行け、往け、夜も懼れず空を翔るあの、あ
の鷲の跡追へよ、汝も自由の身！ 琵琶よ
汝も不羈の身！ 天地心なからんや、汝が
爲に流す涙なからんや。
往け、逝け、わが先驅せよ！
いづこへや行く？ 往け、いづこなりとも！
われと共なる可きや？ 往け、行かば汝が

通ふ所あらん、わが通ふところは未だ知ら
ず。

(琵琶を投下ろす)

おもしるやおもしるやわが琵琶の、風にひ
るがへり、氣を拂ひ退けて、
怒れるや、恨めるや、泣けるや、笑へるや、
喜ぶや、悲しむや其音？
自然の手に弾かれて、わが胸と汝が心とを
契り合せつゝ、
落ち行なり、落ち行くなり！
エー、エー其音は、エー、エー其の琵琶の、
エー、エーわが琵琶の其音はわれに最後を
促すなる！
いでこのわれをも舞ひ下らせん、
舞ひ下らせん抑もや

源、素。

烈火の中にか熱鐵の上にか。
いでいでわれも行かん、
地よわれを嚙むに虎の牙現はせ、海よわれ
をのむに鰐の口開け。いで、いで、わが中
も、生命われを脱けんともがくと覺ゆる。
(素雄振りきりて飛び躍んとす)
危ふし、危ふし、さても怪しの旅客かな。
怪しど？ 世の生涯こそ怪しけれ、
過ぎこし経験や鏡なる……
死こそ物の終りなれ、死して消ゆるこそ、
死すればこそ、復た他の生涯にも入るらめ、
來れ死！ 來れ死！
この崖を舞ひ下らでも、わが最後の力、世
に充つる精氣の力と相協ひてわが死を致す
に難きことやある。

源。

いでわが命ずるに…… いでわが命ずるに
…… いでわが命ずるに…… わが召ぶに
…… わが召ぶに……
死！ 來れるよ汝！
來れるよ汝！ 笑めるもの！
來れ、來れ、疾く刺せよ其針にて。
いま裏ろへぬ、いま物を辨えぬ、いま消え
行く、いま死、いま死！ 死よ、汝を愛す
なり。死よ、汝より易き者はあらじ。
あさらばよ！
(仆る)
こはいかに、こはいかに、舞下りもせでこ
ゝに終りぬるか、あやしやな、あな無殘！ た
び人よ、たび人よ！ 早や起きず、其の魂
はいづこに行くならん、

おそろしや、おそろしや！
あはれ、あはれ、死なしけり、失なしけり。



蓬萊曲別篇を附するに就て

余が自責セルフトリメントの兒なる蓬萊曲は初め兩篇に別ちて世に出でんと企てられたり。即ち素雄が山頂に死する迄を第一篇となし、慈航湖を過ぎて彼岸に達するより尙其後を綴りて後篇を成さんとせしも痼疾余を苦むる事筆を握る毎に甚しきを覺ゆるを以て中道にして變じて之れを一巻となす事とせり。故に僅に慈航湖の一齣を附加するの止を得ざるに至れるなり。然れども他日病魔の退くを待ちて別に一篇を成すの心なきにあらざ、姑らく之を未定稿と著して巻尾に附するのみ、讀者之を諒せよ。

著 者 識

蓬萊曲別篇

(未定稿)

慈航湖

(露姫玉棹を遣ひ素雄失心して)

(船中に在り)

露、これは慈航の湖の上。波穩かに、水滑らかに、岩靜かに、水鳥の何氣なく戯はれ遊げる。松の上に昨夜の月の軽く残れる。富士の白峯に徹けく日光の匂ひ登れる。おもしるき此處の眺望を打捨て、

いざ急がなん西の國。

(仆れたる素雄に向ひ)

素雄ぬしよ、はや覺たまへ、

世とは離れて、きみが恐るゝ者のひとつだにこゝには在らねば。

きみの爲めに死にし露は今きみを載せて、この船に。

きみを迎へ出で、原の彼方に相見てし露は今きみの傍らに。

起きよ、起きよ、素雄ぬし

西の國への旅路めづらしきに。

まだ起きぬ、去らばこの琵琶を以て呼覺してん。

(琵琶を取上て彈ず)

素雄ぬし、いかなる夢に——樂めるか、惱めるか、まだ起きぬ。

(再び琵琶を鳴す)

素雄ぬし、何ぞ覺め玉はぬ。

いで最一度。

(三たび琵琶を鳴す)

素、

誰ぞ、誰ぞ、わが魂を攪き亂すもの？ その鐘の音はいかに、わが行可きところ未だ定らぬか。

空しく澄むかな梵音、われ己れを惡魔の手に任せ、——否な、任せしとは言へ、わが好意にて與へたれば、其の音いかに美しくとも、其の調いかに甘しとも、わが地獄の路を閉づ可きや。

露、

まだ覺めぬ、己れを魔に與へしと言ひ玉ふ、はかなく狂ひ果しかな。

いで最一度、この琵琶を澄さん。

(四度琵琶を鳴す)

素、

走れ、走れ、急げ、急げ、あれ、そなたに、それ、こなたに、こゝにも居る、彼處にも居る、鬼共急げ、急げ、急げ、

われを陰府に連れ行けよ。

魂は言ながら、好し、

このわれは永遠毒火に焼かるゝとも、

思へば、いとしき彼人は、

彼こそはわが行く道に在らぬべし。

左すれば永き離別もこの一時よな、

悲しきはこの事なり。

まだ狂ふよ、いで最一度。

(五度琵琶を鳴す)

それなるは如何、棹の形せるものは陰府の

鎗なるか、わが苦痛の時は來れるか、それ

なるは如何、優しき鬼なるかな、その優し

き顔以てわれをいかにする。

わなみは鬼にあらざ、露姫よ、露姫よ

きみが妻なるよ！

露、

こゝはあやしき霞の中、いかにいかにわが露姫のこゝに居るとは。

そは語るまじ、蓬菜が原にて仙姫と化りて

きみに會ひしときにも語らざりし、死の抗

にて梭を止めて相見しときにも語らざりし、

すみれ咲く谷の下道なる洞にても語らざりし。

わなみこれを語る可き權なし。

それよ、それよ、われ蓬菜山の靈野に入り

しことを覺ゆ、露姫よ、汝が鹿を連れて過

素、

りしを見き、汝が死の坑に梭の音を止めし
 ことも、また瀑をめぐりてあやしき谷の洞
 にも汝の眠れるを劫かせしことも……ま
 たこのわれが雪を踏んで靈山に登り、世の
 王の嘲罵に得堪へで……仆れしまでは現
 に覺ゆれど後は知らず。
 さてはわれ早や世とは離れぬるか、死の關
 も早や越えぬるか、めづらしきこの和平の
 湖は、これぞ神の境に入る可き水ならん。
 餓鬼道に入るも惜らじこの身と思ひ定めし
 を、

われ終に世を出ぬ。

われ終に救はれぬ。

われ遂に家に歸りぬ。

(奇鳥過ぐ)

素、あれ見よ、あやしき靈鳥ならずや

露、彼の名を知るやいかに。

素、わなみは知らず。

見よ彼鳥はわが方を注視つゝ、浮木に憑り

て、物言ひだ氣に見ゆるなり。

言はしめん、言はしめん、靈なる鳥よ、い

づれより來りいづれに飛ぶを尋ねはせず。

語れ語れ、語るべき事あらば。

(鳥は水を離れて語を残して飛ぶ)

「悟れ！ 悟れ！ 夢より醒るもの。」

「祝へ！ 祝へ！ 世より歸るもの。」

「樂しき西に疾く急げ！

「彼の岸に疾く上れ！

「魔はこれより汝が敵ならず！

「よろづのもの盡な汝が友なる可し！

〔たのしめよ、たのしめよ！

(靈鳥去る)

素、まことなり、われもわが長き夢を初めて破
 り、けさぞ生命に歸る心地する。

露姫よ！ 露姫よ！ われ初めて悟りぬ。

其の玉の手を借せよ。

(露姫手を出せば握りて)

露姫よ、一昨日は戀の暗路の侶連、

昨日は世の苦惱の安慰者、

昨夜は變りて眼を攪す者なりしを、

忽ち今朝は俱誓の慈航の友。

日輪霞の彼方に立登りぬるに、

ためらはず遅れん、

疾く彼の岸に到らん。

露姫、彼の岸よ、彼岸よ、樂しきところは彼岸よ、

素雄、

恨なく憂なく辛なきは彼岸よ、

彼岸よ、實に……

友を追ひ、分け來し雲は消行きて

盡きぬやどりに歸へる厂金。



明治二十四年五月廿八日印刷
同年同月廿九日出版



定價金拾六錢

著者

北村門太郎
東京市京橋區彌左衛門町七番地

發行者

丸山垣穂
東京市京橋區彌左衛門町七番地

印刷者

島連太郎
東京市京橋區西紺屋町二十六番地

印刷所

秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

賣捌所

養眞堂
東京市京橋區彌左衛門町七番地

